

千葉教育

桜

令和5年度
No.685

千葉の子どもたちの未来のために

特集

チーム学校の充実

○シリーズ 現代の教育事情

国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科 教授 喜名 朝博
館山市立房南中学校 校長 川名 厚

○提 言

千葉県中央児童相談所 所長 渡邊 直



学校自慢

原点回帰

木更津市立清川中学校校長 ながしま 長島 たづこ 田鶴子



1 はじめに

本校は、全校生徒326名、特別支援学級を含む学級数12の中規模校である。木更津市の市街地にあり、学区は農村地帯と新興住宅地が混在している。明るく素直で人懐こい生徒が多く、穏やかに学校生活を送っている。目標高く物事に取り組む生徒が私の自慢の一つ目である。しかし、一方で結果になかなか満足ができず、自分に自信が持てないという面も持ち合わせている。自信を持って楽しく実り多い人生を送ってほしいという願いから、「自己肯定感が高く、未来を切り拓く生徒の育成」という学校教育目標を定めた。

2 大切にしていること

(1)合意形成

今年度は、非常勤を含め30名の教職員中、12名が新しく異動してきた。それぞれの背景が異なり「今までどおり」が成り立たなくなった。そこで、分からないこと、思ったこと、懸念などを積極的に言葉にしていこうと呼びかけた。だが、習慣の違いから、何を聞くべきかすら、わからないこともあった。しかし、互いが言葉を交わしていくうちに、説明する側もポイントを掴むことができるようになり、意思疎通がスムーズになってきた。今では教職員同士で合意形成をした上でチームとして教育活動を行っていると感じている。

(2)理解と創造

職員会議では、提案者が今までの活動案をどう理解し、結果として今年度どうしていきたいか、それはなぜなのかという、創造につながる一連の過程を重視している。昨年と同

じ内容か、違うかは問わない。その結果として、どのようにしたら自己肯定感が高くなるのか、未来を切り拓く力がつくのか、全員が常にこの二つを考えながら教育活動を行うようになってきたと感じている。

(3)教育活動を仕組むこと

自己肯定感を高めるために自治活動を多く取り入れている。自治活動は生徒が自由に活動することではない。教職員の教育的意図のもとで生徒は活動を行っているのである。

生徒の活動の場面では、教職員はできるだけ前に立たない、指示をしない、と心がけている。事前に生徒と話し合いながら、意図した方向へ誘導する。必要なリハーサルも生徒発案という形で十分に行い、成功させるように導く。生徒に「すべて自分達の力だけで成功した」と錯覚させるように仕組むことが、教育の技術であり醍醐味だと考えている。教科学習も含め、教育活動を丁寧に仕組んでいこうと、教職員一同努力している。

3 おわりに

本校の教育活動で大切にしている三つは、教育の基礎的・基本的なことであり、原点だと思う。取り立てて派手さのない地味な活動が本校の中心をなしている。しかし、弛まず基礎的・基本的な活動に取り組むことが、生徒を伸ばし、教職員の資質向上にもつながると信じている。これらの活動に献身的に取り組む、創造性を発揮する教職員は私の二つ目の自慢である。本校の教職員と、本校の活動を概観する機会を与えてくださった千葉教育編集部に感謝申し上げ、終筆とする。

◆学校自慢 原点回帰	木更津市立清川中学校校長	長島田鶴子
◆提言 非暴力コミュニケーションによるつながりを広める	千葉県中央児童相談所所長	渡邊 直…2
シリーズ 現代の教育事情 チーム学校の充実		
■「チーム学校」を創る	国土舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科教授	喜名 朝博…4
■「小中一貫校・房南学園」での小中連携の取組	館山市立房南中学校校長	川名 厚…8
チーム学校の仲間たち		
■学校を創る 「生徒が主役の学校」を目指して～「今、何ができるか」を問い続ける～	船橋市立宮本中学校校長	日根野達也…10
■学校を支える みんなで支え合い、共に成長していける学校を目指して	いすみ市立国吉中学校教頭	米本 千穂…12
■学校を動かす 若年層教員への指導とチーム学校づくりに向かう主幹教諭の働き	船橋市立峰台小学校主幹教諭	芳賀 悦子…14
■授業を創る 持続可能な社会の担い手を育む社会科学習を目指して	我孫子市立我孫子第一小学校教諭	神野 智尚…16
■授業を創る 専門性を生かした食育のコーディネート	柏市立柏の葉小学校栄養教諭	村中 恵…18
■学校で伸びる 3年目を迎えて	君津市立小櫃小学校養護教諭	神子 夏穂…20
■学校で伸びる あの一言で……	市原市立八幡中学校教諭	市川梨恵香…20
■幼児教育の今 「おたがいさま」のチームワーク	長柄町立ながらこども園園長	川嶋 静雄…21
長期研修生報告		
■令和4年度長期研修生の研究の紹介		令和4年度長期研修生…22
ケーススタディ～Change the world～		
■特別支援学校のICT・支援機器の活用とセンターの機能の充実	県立松戸特別支援学校教諭	西原 数馬…24
情報アラカルト		
■教育支援センターの機能を生かした不登校支援の在り方について	県子どもと親のサポートセンター支援事業部	…26
■令和6年度新規研修事業等の紹介	県総合教育センター	…28
■令和5年度調査研究事業「小学校における自由研究（科学論文）の手引き作成に係る研究（1年目／2年研究）」	県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育班	…30
■読者の声 頼りになる「千葉教育」	鋸南町教育委員会教育長	富永 安男…31
学校 NOW！		
■我が校の働き方改革 我が校の働き方改革～部活動の代替案 放課後教室『学びま専科』の実践を通して～	一宮町立一宮小学校校長	永野 真仁…32
■高校NOW！	【連載・県立高校の今】第6回（最終回） 船橋高校（理数教育の拠点校） 松戸向陽高校（福祉教育コンソーシアム） 匝瑳高校（総合学科） 銚子商業高校（通信制協力校） 県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室	…34
◆発信！特別支援教育	知的障害教育における学習評価から授業改善につなげるフレームワークに関する研究（令和4～5年度）	県総合教育センター特別支援教育部…38
◆千葉歴史の散歩道	「千葉」の名を持つセミの発生地を訪ねてー鶴枝ヒメハルゼミ発生地ー	県教育庁教育振興部文化財課指定文化財班文化財主事 伴 光哲

道 標

平成27年12月に、中央教育審議会は、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」を公表した。この中で、これからの学校が教育課程の改善等を実現し、複雑化・多様化した課題を解決していくためには、学校の組織としての在り方や、学校の組織文化に基づく業務の在り方などを見直し、「チームとしての学校」を作り上げていくことが大切であると述べ、「チームとしての学校」像を、「校長のリーダーシップの下、カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体的にマネジメントされ、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、子供たちに必要な資源・能力を確実に身に付けさせることができる

学校」と定義した。

本県と千葉市が共同して策定した「千葉県・千葉市教員等育成指標」においても「チーム学校」は重視されており、各職の資質向上に関する指標を構成する柱の一つとして、教員（養護教諭、栄養教諭、幼稚園等教諭）には「チーム学校を支える資質能力」を、校長（園長）には「一人一人の強みを生かしたチーム学校の実現」を位置付けている。

各学校は、校長のリーダーシップの下、まさにチーム一丸となって様々なことに取り組んでいるところであろう。本号の特集が、自校のチーム学校の在り方を振り返り、今後の充実発展につながるきっかけとなれば幸いである。

非暴力コミュニケーションによる つながりを広める



千葉県中央児童相談所所長 わたなべ 渡邊 ただし 直

1 児童相談所における子ども虐待対応

児童相談所（児相）は、子どもに関するあらゆる問題について、家族などからの相談に応じる行政機関である。現在は、虐待対応に多くの時間を費やしている。虐待問題は、子どもの安全問題である。行為者（主には親）の『しつけのつもり』といった意図を主にとらえるものではなく、当該行為言動を子どもがどうとらえるのかの視点で考える。子どもが怒鳴られ、叩かれ、痛い思いや、怖い思い、嫌な思い、辛い思いをする、必要な世話がされないなどの状況に曝^{さら}されることは、子どもの人権が侵害される状況であり、子どもの安全・安心が脅かされている状態である。子どもは権利の主体者であり、単なる対象や客体ではない。それゆえに、子どもが大人からみて、してほしいことをしなかったり、してほしくないことをしている状況があるからといって、親や同居人や周りの大人に、「何やっている」「いつも言ってんだろう」「〇〇するなって」「何回言ったら分かるんだ」「バカじゃないか」「今回は許さないぞ」「お前なんか生まなければよかった」とされない、つまり、怒鳴られたり叩かれたりしない権利を有しているのである。このことに係る国連の「子どもの権利」に関する「条約」を日本は平成6年に批准した。しかし、子どもが権利の主体者であることを国内法に反映させたのは、ユニセフからの再三の指摘（「児童を権利を有する人間として尊重しない伝統的な価値観により、児童の意見の尊重が著しく制限されている」）を受けて、批准から22年経過した平成

28年の児童福祉法改正であった。

2 不適切養育に曝^{さら}されることによる子どもへの悪影響

虐待という人権侵害行為は、子どもの心身に深い悪影響を残す。その回復には、長期間の治療やケアが必要となる。悪影響は、虐待を受けていた期間（頻度）や、虐待の態様（深刻度）、子どもの年齢や性格等によりさまざまであるが、身体的影響、知的発達面への影響、心理的影響に及ぶ。このうち、心理的影響とは、本来最も安心を与えられる存在であるはずの保護者から侵害行為を受けることによって適切に欲求を満たされることがなくなり、基本的な信頼関係を構築できず、愛着形成困難となり、対人関係上の問題を生じさせてしまうこと、低い自己評価、多動や行動コントロールの問題、トラウマ（心の傷）、心的外傷後ストレス障害（PTSD）など、精神的症状がみられるようになることである。

3 虐待状況に曝^{さら}された子どもへの対応

(1)失敗を意識させるよりも成功体験の醸成を

学校で日々出会っている子どものいわゆる問題行動といわれる行為の背景には、家庭内で上記のような不適切養育に曝^{さら}されていたことによる“症状”としての行動表出の可能性がある。子どもができていない行動（don't）を頭ごなしに叱りつけたり、不用意に親に知らせるなどの対応をすることは、子どもとの関係をこじらせ、逆効果になることも多い。行動の背景を推察し「どうしたの」などの問

いかけから、同様の状況になったときのよりよい行動を前もって具体的に対策する。そして、できた時にはその行動を表現して、それができていること（do）を褒め明確化する。このような対応を意識することが、子どもの成功体験を増やし心の拠所（受容・自信）をつくることに繋がる。また、虐待を疑ったら、先生方ひとりで、あるいは一つの機関（学校）のみで抱えこむことなく、通告を必要な支援につながるきっかけとして、これからの対応について、児童福祉も含めて、ともに考えていける連携体制が必要である。

(2)非暴力で人と人がつながる基本を知る

非暴力コミュニケーションを各自が知り、対子どもだけでなく職員同士のつながりも非暴力のモデルとなれることが望ましい。パッケージとして非暴力を覚える「機中八策[®]」を紹介する。「機中八策[®]」は高度な専門性を持つペアレント・トレーニング（ペアトレ）ではない。行動・ことばをカード化して、暴力的な雰囲気醸成を醸し出し、そのカードを切られた人が青ざめてしまうような行動の切り札は、ブルーカードとして「ひ・ど・い・お・と・ぎ・ば・なし」の8枚、非暴力的な雰囲気醸成で、そのカードを切られた人がほっこり温かな気持ちになる行動の切り札は、オレンジカードとして「ほ・ま・れ・か・が・や・き・を」の8枚とし、頭文字つづりの合言葉で覚えられるように構成されている。これをチーム・ユニット・家族・地域のネットワークの中での合言葉とし、そこでお互いに声かけし、リマインドしあえるようになること、声をかけあって日常のコミュニケーションでオレンジカードが割合として多く切られる地域の文化が創造できるようになることを目指している。

(3)分かっていてもついブルーカードを切る

ブルーカードは無意識的に切れるカードである。オレンジカードは手持ちの切り札とし

て既に持っているカードである。しかし、ヒトには感情があるので、意識しないとオレンジカードは切れない。そして、もしもあなたがブルーカードを切る傾向にあるならば、オレンジカードが切れるようになる「気づきスイッチ（装置）」として「機中八策[®]」を活用してもらいたい。日常生活でオレンジカードがスムーズに切れるようになるには「練習」が必要である。ヒトはオレンジカードを切られることで「これでいいんだ」という自信・自己肯定感・自己効力感が醸成される。たくさんの成功体験をしたヒトは、自分で自分のことができる、考えられるヒトとして育つ。

あなたは 相手がしてほしくない行動をした あるいは してほしい行動をしない そんな場面に直面した時 どの色のどの行動・ことばの切り札を切りますか？	
▼コミュニケーションを円滑にする オレンジカード	▼伝わりにくいコミュニケーション ブルーカード
ほ める(褒める)	ひ ていけい(否定形)
ま っ(待つ)	ど (怒)鳴る叩く
れ んしゅう(練習)	い や(嫌)み
か わり(代)にすることを提示	お ど(脅)す
が んぎょう(環境)づくり <small>いんげん ちからに おきかえ してゆく 環境</small>	と (問)う聞く考えさせる
や くぞく(約束)	ぎ (疑)問形
きもち(気持ち)に理解を示す	ば つ(罰)をあたえる
を ちつく(落ち着く)	なし なじる(人格否定形)
どちらの切り札の方が行動をスムーズに切り替えてもらえるでしょう	

図：「機中八策[®]」の頭文字つづり

(4)不適切養育を容認する文化の修正に向けて

さらに、この非暴力コミュニケーションを通して、虐待が起きる前の予防策を社会的に構築していけたらと思う。社会全体の体罰や怒鳴る、デイスるなどのハラスメントに至りそうになる不適切養育を容認する育児文化の修正に向けて、「非暴力が当たり前の文化」が定着するため「機中八策[®]」をいち早く地域の合言葉とし、「ひどいおとぎばなし」より「ほまれかがやきを」そして「たくさんの成功体験を地域で」と展開できれば、これは新たなソーシャルキャピタルになると思われる。

「チーム学校」を創る

国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科教授 きな 喜名 ともひろ 朝博



1 「チーム○○」の誤解

「チーム○○」という言葉は、チームで丸となって頑張っていこうという精神論ではない。特に企業や行政、組織のトップがこの言葉を使うと、どうしてもそんなニュアンスが含まれているように聞こえてしまう。チームのメンバー一人一人がもてる力を最大限に発揮することでチーム力を高めていこうとするものが「チーム○○」であり、チームのリーダーである管理職は、全てのメンバーがその能力を発揮できる環境を整えること、その能力を引き出すことが責務となる。

これは「チーム学校」も同様である。教職員一人一人が、もてる能力を発揮し、相乗効果によって学校力を高め、様々な教育課題を解決していく組織が「チーム学校」である。

「チーム学校」（「チームとしての学校」という言葉が一般化したのは、平成27年12月の中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」であった。ここでは、「チームとしての学校」像を次のように説明している。

〔校長のリーダーシップの下、カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体的にマネジメントされ、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、子供たちに必要な資質・能力を確実に身に付けさせることができる学校〕

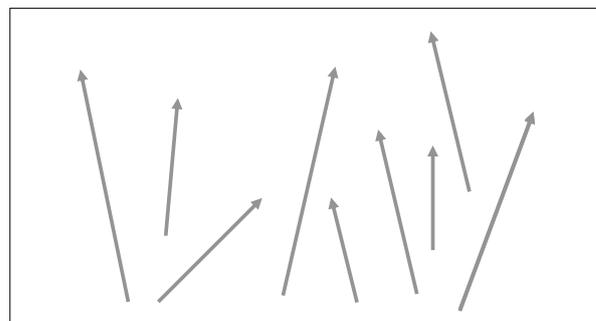
キーワードは「多様な人材」と「専門性」である。教職員の多様性と専門性の高さが、「チーム学校」を実現していく。

「チーム学校」はスローガンではない。教職員一人一人の意識の高揚と能力の発揮によって創っていくものである。また、その状態であることを目指す状態目標でもある。

校長のリーダーシップの下、全教職員で「チーム学校」を創っていくための方策について考えていきたい。

2 ベクトルを最大化する

教職員の多様性は数学のベクトルに例えることができる。ベクトルとは、向きと大きさをもつ量である。教職員一人一人が目指す方向性が「向き」であり、その能力が「大きさ」（＝長さ）と考えることができる。



上図のベクトルは、教職員一人一人を表している。さらに、個々のベクトルの和がチーム学校としての学校力の総体となる。学校力を最大化するには、ベクトルの向きを揃えること、教職員一人一人がその能力を高めていくこと（ベクトルを伸ばすこと）が必要となる。

教職員の多様性とは、ベクトルの向きが多様であるということではない。能力や経験の多様性、見方・考え方の多様性であって、教職員が目指す方向性とは異なることに留意す

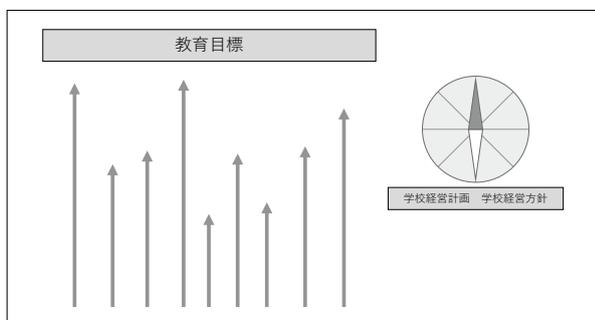


る必要がある。

前述の答申を受け、学校にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の配置が進んだ。当時の「多様な人材」の考え方は専門家の導入にあったが、令和の時代にあっては組織内の多様性が求められる。画一的な組織はもはやリスクであるとも言われている。多様な人材が互いの能力を発揮することで、相乗効果が生まれ、新たな考えが創出されることが期待される。

3 ベクトルの向きをそろえる

チーム学校を創っていくためには、教職員が向かう方向性を定める必要がある。ベクトルの向きをそろえるための方向性とは何か、それは、学校の教育目標の達成である。そして、そのための道筋を示した校長の学校経営計画、学校経営方針が羅針盤の役割を果たすことになる。



学校の教育目標もまた、スローガンではない。その状態であることを目指す状態目標である。教室に掲げられている教育目標を実質化していくためにも、教育目標の明確化が求められている。

現行の学習指導要領総則には次のような記述がある。

〔教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編

成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。(後略)〕

(小学校学習指導要領総則 第2の1より)

(下線は筆者による。下線の記述は、中学校、高等学校、特別支援学校に共通)

学校として育成すべき子どもたちの資質・能力を明確にしたものが学校の教育目標であり、教職員は元より、子どもたちや保護者・地域とも共有され、その実現を目指すべきものである。

しかし、多くの教育目標は観念的・概念的であり、そのために何をするのか、どうすればその姿になるのかが分かりにくい。

そこで、校長の学校経営計画がその道筋を示すことになる。学校経営計画を具現化していくことでチーム学校のベクトルが揃っていく。全ての教育実践は、教育目標に向かっていることを意識したい。さらに、子どもたちや保護者・地域にも教育目標が目指す具体的な姿を説明し、共有しておくべきである。

一方、学校には目標があふれている。学年目標、学級目標、道徳教育の目標、等々、それらの目標が、教育目標の下位目標となっていなければならない。その意味でも、学校経営計画と学年・学級経営計画を連動させることが重要である。教育目標を具現化するために、学年・学級として何をしていくか、それぞれの発達段階や実態に合わせてカスタマイズしていくことで、チームとしての方向性が明確になっていく。さらに、ここで教職員の多様性が発揮され、様々な創意工夫がなされれば教育活動はより充実していく。

学級経営、学年経営の集合体が学校経営である。教職員一人一人が学校経営を担っているという自覚と自負をもつことでチーム学校は盤石になっていく。

1 シリーズ 現代の教育事情

4 ベクトルを伸ばす

チーム学校としての学校力を最大化するためのもう一つの方策は、教職員一人一人がその能力を高めていくこと、ベクトルを伸ばすことである。それは、教職員の資質・能力向上に他ならない。特別支援教育やICTの活用等、時代に応じて教職員、特に教師に求められる資質・能力の内容が変わってきている。では、その具体的内容は何か。

令和4年8月に改正された文科省の「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」では、教師に共通的に求められる資質の具体的内容が次の5点に整理されている。

- 教職に必要な素養に主として関するもの
- 学習指導に主として関するもの
- 生徒指導に主として関するもの
- 特別な配慮や支援を必要とする子供への対応に主として関するもの
- ICTや情報・教育データの利活用に主として関するもの

※各項目の具体的内容は右の二次元バーコードから確認いただきたい。

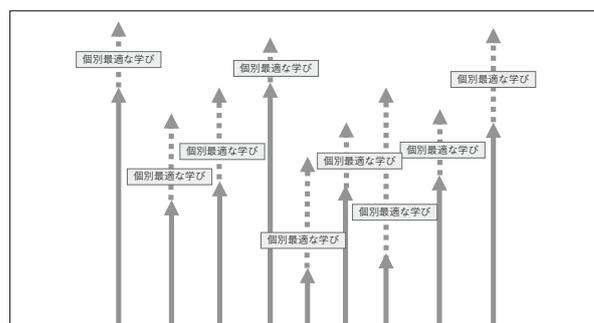


五つの項目は全ての教師に共通に求められるものであるが、教職に必要な素養は別として、他の4項目は自らの得意分野につながるものである。それが、教職員の多様性を担保する。教科指導に長けた教員、ICT活用を得意とする教職員、特別支援教育に造詣が深い教員等、チーム学校に欠かせない力をつけていくためにも自らの得意分野を伸ばしていきたい。

全ての教職員が、職務を遂行しながら自らの資質・能力を向上させていくこと、職務を学びにすることが学校現場の学びの特徴である。

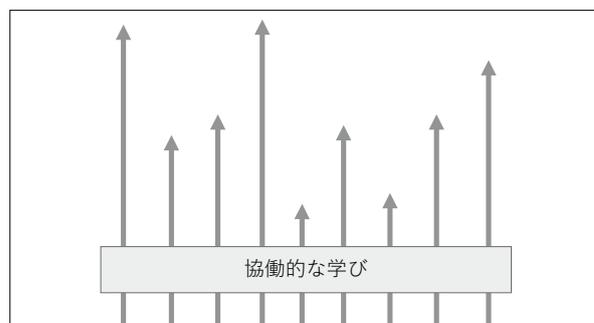
その学びには二つの方法がある。ひとつは

一人一人が自分でベクトルを伸ばしていくことであり、「個別最適な学び」の実現である。



教職員の個別最適な学びは、自らの資質・能力の客観的理解から始まる。教育委員会等が作成する指標やチェックリストに基づいて自己評価を行うとともに、管理職との面談を経て自己研鑽の方向性を定めていく。このとき、自己の課題解決は元より、得意分野を伸ばすことも考えていきたい。

もうひとつの学びが、チーム学校全体としてベクトルを伸ばしていくことである。それが、一人一人の「個別最適な学び」を前提とした「協働的な学び」の実現である。



教職員の協働的な学びの実現は、チーム学校の理想の姿である。それは、学び合う組織であり、自立した組織への高まりでもある。

従来、学校には職務を通して先輩教職員が若手教職員を指導するという文化があった。この仕組みには、学校の暗黙知の継承のような側面もあったが、教職員の年齢構成の変化によりその継承が難しくなっている。

そこで、この文化を現状に合わせて再生させるのが「学び合う組織」の実現である。先



輩が後輩に教えるという構図から、誰もが教え合い、学び合う雰囲気醸成していく。その教職員の得意分野やアイデアを生かすことを考えれば、年齢や経験年数は関係ない。誰もが教える立場となり、誰もが教えてもらう立場となる。

子どもたちの成長を話題にわいわいと語り合っている職員室、ICTの活用方法を学び合っている職員室は、協働的な学びが日常化している。教職員にも主体的・対話的で深い学びが求められているのだ。

令和4年12月の中教審答申〔『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～〕の中に次のような記述がある。

〔個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルである。「令和の日本型学校教育」を実現するためには、子供たちの学びの転換とともに、教師自身の学び（研修観）の転換を図る必要がある。〕（下線は筆者による）

チーム学校を創っていくには、これまでの研修観を変え、学び合う組織への転換が求められている。

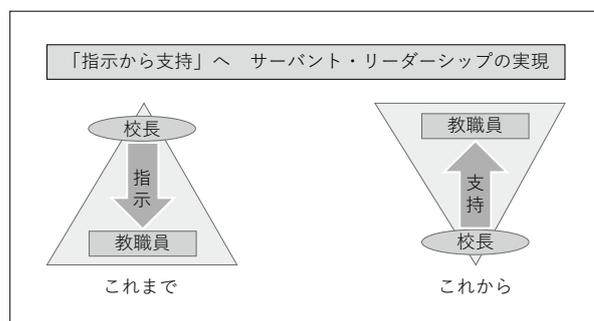
5 チーム学校の基盤を作る

教職員のベクトルの向きを揃え、能力を伸ばしていくことで、チーム学校としての学校力が最大化する。それを円滑にするためにはベクトルが動きやすく、伸びやすい基盤を作

る必要がある。以下の二つの基盤作りは、管理職の新たな責務となる。

第1の基盤は「心理的安全性」の確保である。企業等でも取り入れられている組織を支える概念であり、互いに他を尊重する精神を前提に、何でも言い合える、何でも聞くことができる雰囲気を醸成していくことである。管理職や中堅教員が積極的に聞いたり、教え合ったりすることで教職員も安心して、分からないことを分からないと言えたり、教えてほしいと助けを求めることのハードルが下がっていく。経験や年齢等に関係なく自らの意見を表明でき、安心して職務を全うするための基盤を作っていくことでベクトルは自由に動き、チーム学校が創られていく。

第2の基盤は「サーバント・リーダーシップ」の実現である。



教職員一人一人がもてる力を最大限に発揮できるような場をつくり、環境を整えることで、互いに信頼を獲得し、主体性を発揮できるようにしていく。これまでのトップダウンの「指示」ではなく、教職員一人一人を「支持」することで、自らの力でベクトルを伸ばし、その向きを修正できるようになる。

サーバント・リーダーシップは、心理的安全性の必要条件であるとも言える。

チーム学校創りの方策は、そのまま学年や学級経営に転用できる。新年度、新たな発想で「チーム学校」「チーム〇年生」「チーム〇年〇組」を創っていただきたい。

「小中一貫校・房南学園」での小中連携の取組

館山市立房南中学校校長 かわな あつし 川名 厚



1 はじめに

館山市立房南中学校は、開校77年目、全校生徒73名の小規模校である。房総半島の南部に位置し、自然豊かな環境にある。保護者や地域住民は学校に対して大変理解があり、「おらが学校」という思いが強い。

平成29年春、学区にあった小学校2校が統合し、房南中の敷地内に房南小という新しい学校が建てられた。

房南小と房南中は、それぞれに校長がおり、学校設置条例上は独立しているが、館山市の小中学校管理規則により、小中双方を総称して「小中一貫校・房南学園」の名称を使用できることになっている。

本稿では、本校がチーム学校として取り組んでいる小中一貫教育について紹介する。

2 本校のめざす教職員像

本校は、目指す教職員像として、「進んで自分の力量を高める教職員」と「協力して経営に参画する教職員」を掲げている。前者は、「向上心あふれる房南中職員」、後者は、「一致団結する房南中職員」と言い換えられる。そして、これらが、本校のチーム学校づくりを進める上での柱となっている。

3 「小中一貫校・房南学園」の一貫・連携の形態

施設面では、校舎は、新設された小学校棟（2階が体育館）と既存の中学校棟とに分かれているが、体育館、既存のプール、小学校

新設にあたり整備された運動場、中学校棟にある各特別教室は全て小中で共用している。いわゆる「施設一体型」である。

教育課程については、9年間を見通した教育課程を編成しているわけではない。

「それぞれに校長を配置し、小中の独立性を活かしながら、情報交換や交流等を通して、小中の円滑な接続を目指そうとしてきた」（開校時の市教育委員会の資料から）という経緯がある。すなわち、実際の形態は、小中の円滑な接続をねらった「施設一体型の小中連携教育」ということになる。

4 小中で連携して行っている教育活動

(1) 避難訓練と交通安全指導

施設一体という構造上、避難訓練は合同で行うことにこそ意義がある。4月（地震を想定）、6月（大地震による津波警報発令を想定。保護者引き渡しを実施）、7月（不審者侵入を想定）、12月（火災を想定）の4回行っている。

中学校に進学しても、避難経路が変わるだけで避難方法や避難場所は変わらないため、年度当初の訓練も、大きな混乱もなく、スムーズに避難することができている。

児童生徒の登校時には、小中両校の職員が、学区内各所に分かれて登校指導を行っている。指導する必要がある場合は、その日の担当職員が直接児童生徒に指導したり、学校に戻ってから小中で情報共有したのち、学活の時間等を活用して全体に指導したりしている。避



難訓練と同様、交通安全指導も9年間継続して行っていることにより、児童生徒の意識が高まっている。今後も小中で連携した安全指導を続けていきたい。

(2)運動会

一貫校開校後4年間、小中合同の運動会を9月初旬に行ってきたが、小学校から、「小学生には時期的に厳しいため、開催時期を5月に移行してほしい。」との要望が出されていた。令和3・4年度は、修学旅行の実施時期や、コロナ禍により別開催としていたが、今年度は、5月に移行して3年ぶりに小中合同で開催した。

合同開催となると、調整しなければならない点多々あり、職員の負担も大きかったが、生徒にとって、責任感の涵養等、それを補って余りある成果が得られた喜びがあった。



合同運動会のハイライト

小1から中3までの全員でバトンを繋ぐ「房南学園リレー」

(3)中学校区生徒指導連絡会

館山市では、小中で連携した生徒指導の充実のため、中学校区単位で年に数回、小中合同の生徒指導連絡会を開催している。参加者は管理職、生徒指導担当職員、市教委生徒指導担当指導主事、南房総教育事務所指導室安房分室の生徒指導担当指導主事である。

本校の場合は、施設一体という環境であるため、日常적으로お互いの児童生徒の姿を目にしている。このため、生徒指導連絡会で情報

交換する際には、児童生徒の顔がわかることが多いので、その後校内で姿を見かけた時に、生徒指導連絡会での情報に基づいて、適切に対応することができている。

(4)学力向上推進コーディネーター

「学力向上推進コーディネーター」とは、館山市内の各中学校区に1名配置され、小中学校が連携して学力向上や生徒指導等を行うための管理職への指導助言や調整等を行う目的で勤務している。

館山市独自の取組であり、本校にとっては、チーム学校の大事なメンバーとなっている。

コーディネーターはいずれも元校長であり、月に1～2回来校して授業を参観し、学習指導や生徒指導の面で、気づいたことを管理職に助言している。時間があれば、コーディネーターが直接授業者に対して指導したり、授業者の相談に乗ったりすることもある。

小中双方の実践を見てくれているため、一貫した学習指導や生徒指導を行うことにもつながるとともに、小中連携した学校経営についても助言をいただくことができている。校長にとっては大変心強い存在である。

5 おわりに

一貫校として開校した際は、その取組の柱として、小中相互の連携教育に加え、「ふるさと房南をテーマとした学校、家庭、地域の連携による学校づくり」が掲げられていた。しかし、コロナ禍により、地域と連携した実践が次第に減少してしまっている。これは大変残念なことである。

今後は、小学校との連携強化に加え、地域と連携した実践を再考することを通して「房南学園で学んでよかった」と誇りを持てる生徒を増やしていきたいと考えている。そのためにも、チーム学校の益々の充実を図っていきたい。



「生徒が主役の学校」を目指して ～「今、何ができるか」を問い続ける～

船橋市立宮本中学校校長 ひねの たつや
日根野 達也



1 はじめに

本校は、昭和22年に戦後の教育改革により新制中学校として開校した学校である。これまでの歴史を紐解くと数々の栄光の記録が残されており、卒業生や保護者、地域の皆様の強力な支えにより、学校が成り立っている。私にとっては、教頭として平成21、22年に勤務した思い出深い学校でもあり、PTAや地域の方々の学校愛を強く感じるものだった。13年ぶりに校長として着任した本校は大きく様変わりしていた。コロナ禍の影響もあり、地域との連携は途切れがちで、当時の様子を知る職員は皆無となっていた。一方、令和4年の着任とともに、船橋市で唯一のコミュニティスクールをスタートさせることとなった。

今般は、「生徒が主役の学校」を目指し、学校行事や地域との連携を活かして、「自己実現のできる生徒の育成」を図る取組について紹介する。

2 「生徒が主役の学校」を目指す

本校の学校教育目標は、「一人一人が生き生きと行動し、自己実現のできる生徒の育成」である。具体的には、「自ら考え、行動できる」「責任を持ち、自ら進んで活動できる」ようになってほしいと願っている。

私から、全校生徒に向けて「『今、何ができるか』を考え、行動に移せる人になってほしい。」と繰り返し伝え、教職員にも、学級や委員会、部活動など、生徒の実情に応じて、かみ砕いて説明してもらっている。

3 学校行事を通して

本校は全校生徒が900名を超える大規模校であり、運動会や合唱祭などの学校行事は全校で行うことができれば、ダイナミックで感動的なものになる。さらに、生徒が前面に出るよう、教職員は助言・サポートに徹することで、生徒に充実感と成功体験を積みせようと考えた。

(1)運動会での全校ダンス

三色対抗の運動会で、それぞれの色ごとに1年生から3年生まで全生徒によるダンスを行った。選曲・振り付け・フォーメーションなどすべて生徒に任せるという冒険である。3年生のダンスリーダーがすべての指示を出すのだが、もちろんすべてがスムーズには進まない。そのたびに生徒たちの、悩み、考え、議論する姿が見られた。そっと助言する教職員に励まされ、困難を乗り越え、当日は三色とも素晴らしい発表を披露した。満足気な生徒たちの表情が、その成長を表していた。

(2)閉会式でできた全校生徒の団結の輪



三色対抗で行った運動会だが、勝敗が決した後には、誰からの指示でもなく、自然と生徒たちの意思でグラウンドに全校生徒が肩を組み円陣を作り出した。お互いを尊重し、たた

えあう生徒たちを見て、涙する職員の姿を見ることができた。

(3)合唱祭での特別支援学級の発表

千人規模で使用できるホールを貸し切って行った合唱祭において、生徒の自発的な行動が見受けられた。特別支援学級の発表には、実行委員・有志生徒や箏曲部、教員も参加し、パフォーマンスが行われた。通常学級と特別支援学級との交流を深めたいとの思いから、勇気を出して行った箏演奏とソーラン節演奏であった。すると、会場から自然と「どっこいしょ」と大きな声援が響きだした。最後はホール全体に響き渡る大声援となり、一体感を感じることでできる心が温まる瞬間を経験できた。

運動会や合唱祭における感動場面は生徒の自己肯定感の醸成につながったと思っているが、そのために教職員が綿密な計画と粘り強いサポートをしていたことは想像に難くない。

4 地域との連携を通して

令和4年にスタートした学校運営協議会（コミュニティスクール）では、それまでの学校が地域に支援してもらうことから、地域と学校が協働し、互いを支えあうことが求められる。学校は地域の一員であることを、内外にアピールすることが大切だ。

コミュニティスクールのスタートにあたり、コロナ禍に途切れてしまった、それまでの強固な学校と地域との結びつきを回復することが大切と考えた。一方で、教職員の働き方改革、PTA活動も改革の時期であることなどを考慮すると、地域との連携を効果的かつ合理的に実行することが要となる。

宮本中学区はその中心にJR東船橋駅があり、「ひがふなフェスタ」という大きなイベントが行われている。これまで、本校PTAバザーは「地域交流会」という名で校内で実

施していたが、本年度から学校から飛び出し、「ひがふなフェスタ」で地域の方々に知ってもらうべく、実施可能な範囲内で活動を行うこととした。

市長も参加する開会式の司会を生徒会本部役員生徒が務め、駅改札前に生徒会活動の紹介パネル展示、ユニセフ募金活動、管弦楽部や箏曲部の演奏、特別支援学級在籍生徒の作ったクッキーの販売、野球部員による清掃活動、そしてPTAによる出店等々、大きく本校をアピールするとともに、参加生徒や職員が地域に支えられていることを実感する瞬間でもあった。学校経営方針の一つである「家庭・地域に信頼される開かれた学校づくり」が一步進んだことを実感した。

5 「生徒ファースト」のために

本校は大規模校で、教職員数も多い。「生徒ファースト」の考え方を全教職員が共有するためには、コミュニケーションが何よりも重要である。教職員が相互に考えを伝えあえる職場環境を構築することが何よりも重要と痛感している。働き方改革も意識し、全体打ち合わせは週一回に限定しているが、主任会や日頃の会話を大切にし、今以上に風通しの良い組織として機能させていきたい。

6 おわりに

正解のない変革の時代と言われている。学校教育にも正解はないのだと思う。学校規模も違えば、地域の実情も違う。抱えている課題も様々である。他の学校と同じことをしていれば、何とかなる時代ではない。子供たちが生きていく未来を考えた時、目の前の子供たちにとって何が必要なのか、何が大事なのか、教育の最前線で働く教職員一人ひとりが真剣に考え、自らの意志で行動していく時代ではないか。



みんなで支え合い、 共に成長していける学校を目指して



いすみ市立国吉中学校教頭 よねもと 米本 ちほ 千穂

1 はじめに

本校のあるいすみ市は温和な気候で、そこに住む人々もとても温かい雰囲気を持っている。また、教育に対して関心を寄せており、保護者の学校行事への参加率は高く、PTA活動等に大変協力的である。そのような地域に見守られて育つ子供たちもとても素直で礼儀正しい。共感性があり、親和性が高く、和気あいあいと生活をしている。一方で、1小1中の小さな学区であり、変化に乏しく、新しいものに触れる機会が少ない。積極的に未知のものにチャレンジすることを苦手とする傾向もうかがえる。そこで、年度の初めに校長は子供たちに「国吉中学校 = K⁴、カッコよくキラキラ輝く国中生になろう」と語った。このキャッチフレーズのもと、職員も子供も一丸となり、たくさんのことに挑戦し、みんなで成長できる学校を目指している。

2 過去の学びから

私は平成29年度に長期研修生として教育臨床を学ぶ機会をいただいた。その中で特に心に残っているのは、「心を開く信頼関係づくり」である。素の自分を出し、素直な感情のふれあいできて初めて信頼関係を築くことができ、その信頼関係の中で人は成長する。そして信頼関係を作るのは簡単なようでいてとても難しいということも。今までのあわただしい教員生活の中で、子供たちとの関係づくりを雰囲気でも乗り切ろうとし、うまくいかない時は個々の相性の問題だと考えてきた自

分にとって大きな考え方の転換となった。

教頭として着任するにあたり、これから出会う人と感情のふれあいができる信頼関係をまず築きたいと思った。立場上、子供たちと授業や様々な活動で直接一緒に過ごすことは少なくなるが、職員室の先生方、保護者、学校にかかわる外部の方々との関係づくりを進め、明るく和やかな学校作りに寄与していきたいという気持ちで教頭としての学校生活をスタートさせた。

3 体験を重視した活動

前述のとおり、まじめで穏やかな半面、新しいことに挑戦することが苦手な子供たちのために、多くの人と触れ合い、体験することを重視した取組を行ってきた。行事は生徒指導の重要な場面となりうるが、計画的に配置していかないと他の教育活動にしわ寄せがいつてしまう。そこで、体験的な取組を行事として職員に下ろす前に、外部の担当の方とのやり取りを丁寧に行い、学校の実態に即し、実施に無理がない計画となるように心がけた。以下に今年度の体験を重視した取組を紹介する。

(1) 企業による出前授業

6月、「ちば学校・家庭・地域応援企業等登録制度」の登録企業における、教育CSRとして、株式会社パル・ミートの皆さんをお招きし、食育の出前授業を行った。スライドを見ながら食物自給率の問題やフードロスの問題を、グループごとのワークを通して学んだ。

(2)ウォパン中学校交流

30年の歴史を持つアメリカのウォパン中学校との交流は、コロナで途切れていたが、今年度4年ぶりに再開することができた。5月にはウォパン中の生徒を迎え、9月には本校の代表生徒8名がアメリカを訪問し、アメリカの学校や家庭生活を体験した。

(3)インドネシア学校交流

11月、インドネシアのアル・アザール36中学校の生徒27名が、国吉中学校を訪れた。体育館での歓迎式典後、1～3年生の数学・保健体育・音楽の授業に参加した。お互い母国語ではない英語を使つてのコミュニケーションのためか、はじめは緊張していたが、徐々に打ち解け合うことができ、交流を深めることができた。



(4)千葉工業大学出前授業

千葉工業大学の未来ロボット技術研究センター室長の先川原正浩先生による講演「未来に向けてのロボット教室」を行った。学生の自作ロボットの操作体験を含め、先端技術の素晴らしさに触れるよい機会となった。



(5)高齢者ふれあい学級

地域の老人クラブの方々をお招きし、1年生がグラウンドゴルフを体験した。90代の方もいらして、地域で生き生きと活動する高齢者を良き先輩として和気あいあいとコースを回った。

(6)夷隅特別支援学校交流

12月、1年生が夷隅特別支援学校を訪れ、一緒にボッチャに取り組み、交流した。ほとんどの生徒がボッチャは初めての体験で、市原ボッチャクラブの方々や支援学校の先生、生徒の皆さんに教えてもらいながら楽しくプレイした。

4 おわりに

着任する時は、校長を助け、職員を支えるのが教頭なのだと意気込んでいた。

しかし実際には、学校全体に目配りする校長と、気づいたらすぐに動く職員の熱意に、自分が支えられることの方が多かったように思う。その中で、自分一人が支えるのだと意気込むよりも、支えてもらったときに素直に感謝の気持ちを述べる方がよいと学んだ。

何か頼めば気持ちよく返事をし、喜んで行動してくれる若い職員には頭が下がる思いでいる。その明るいパワーに呼応するように成長する子供たちがいて、学校は本当に素晴らしいところだと思う。

もちろん、様々な問題も起こる。しかし、信頼関係に支えられた中で、やり取りを繰り返すことで問題は解決に向かうし、それを成長につなげることができる。

学校が、大人も子供も支え合って共に成長していける場所であってほしいと願っている。



若年層教員への指導と チーム学校づくりに向かう主幹教諭の働き



船橋市立峰台小学校主幹教諭 芳賀 悦子

1 はじめに

「主幹教諭は、校長及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、並びに児童の教育をつかさどる。」と学校教育法にある。私は、校長より若年層教諭の指導力向上と不登校児童への対応や個別最適な学びのための保護者や関係機関との関わり等について、教職員の中心となって校務を行うよう命じられた。主幹教諭について知っていただく一助になればと思い、私の取り組みを紹介することとする。

『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』を活用した授業記録がとても有効だった（記録用紙⑥10月以降）。授業者も、授業を組み立てるときにこの表にのっとして考えていくとやりやすかったようだ。

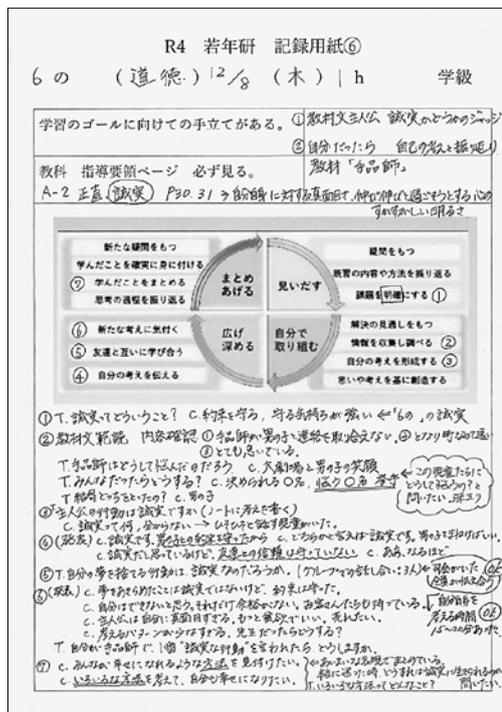
2 若年層教員の授業力向上への指導方法

(1) 授業計画、個別授業参観、事後指導

1週間に1時間ずつ9名の若年層教員（5年目まで）の授業参観をし、その日のうちに振り返りをした。週案枠を作り、参観日時を決め、教科や学習のねらいを入力してもらい、全教科に取り組みさせた。

毎時間視点を絞って参観することを心がけた。指導案は作成することへの負担を考え作成させていない。普段、担任は、頭の中に指導計画があり授業を進めている。その積み重ねの訓練も必要だと考えたからだ。だからこそ、実施している授業を参観している私が、記録用紙にその経緯を起こしていくことが、事後指導や授業者の振り返りに役立つと考えていた。授業中に記録していくので静々と手書きをした。記録用紙は、6種類となった。月によって視点を変化させていった。

児童の発達段階や研究授業等を考えながら、参観の視点を変化していった。最終的に、



この記録用紙を使って、事後指導を行った。各教科の学習内容の理解度確認や指導方法の話は当たり前だが、教室環境、言葉遣い、指示の仕方、授業以外の困りごとについても話し合うようにした。

(2) 若年層研修会

1か月に1度、研修会を開き、全員共通に指導したいことや他の学級の様子を知らせた。また、実際に1年生で授業をして見せた。参観する視点が明確になるよう、授業展開が分かる資料を作った。9月以降、指導課要請訪

問や全員1授業研をし、その時間の運営や指導を続けた。県事務職員に協力してもらい、服務についても研修を行った。

指導を受けてきた教員は、授業作りの段階で、前回までに指導されたことを生かして、授業を組み立てたと答えている。また、生徒指導や教育相談についても、児童への声かけ、褒め方、指示の仕方、資料の提示方法等、教員としての技術を高められたと答えていた。

資料は、管理職に確認してもらい、次の指導への指針を提示していただいていた。ファイルを見ると、若年層教員の指導力の向上が分かり、お互いのモチベーションが高まる。この活動を続けていけば、学校の教育活動の質を向上させる取り組みになるだろう。

3 チーム学校をつくる

学校には、教員の授業力向上のほかにも、様々な課題がある。不登校児童への対応や個別最適な学びのための保護者や関係機関との関わりについて、主幹教諭の力が試される部分だ。令和4年12月、文部科学大臣より「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策「COCOLOプラン」の通達があった。「1. 学びたいと思ったときに学べる環境づくり 2. チーム学校で支援する 3. 学校を安心して学べる場所にする」必要があった。1人1台端末の利活用では、Google Meetを使って授業参観できるようにした。不登校児童の保護者には、主幹教諭と一緒に関わることを伝えている。直接面談をすること、電話での相談、家庭訪問と、担任と一緒に行動したり、分担したりしている。さらに、私たちには強力なスタッフ（市SC、県SC、SSW、学習ボランティア、学習サポーター）が付いている。特に、毎週関わっていただける市SC、SSWの2人には、教員の専門外の話や福祉の話

をしていただくことができる。不登校児童が一番苦しんでいるのは確かだが、保護者の負担も計り知れない。管理職を含め、この体制でチーム学校をつくり、活動を分担し、それぞれの役職の特長を生かしていく。

関係機関とは、船橋市の総合教育センター教育相談班・教育支援班、青少年センター、病院、フリースクール、市役所福祉課、家庭児童相談室、こども食堂等である。どこに近づけることがベストなのか、管理職の助言を受けながら、教育相談を進めていく。保護者や関係機関と関わる時、闇雲に手立てを提案することは適切ではない。児童と保護者の意向を踏まえ、6年間で・この1年で・この半年でと、話し合いながら目標を決めることが大切だ。

日々問題を抱える児童に相對したとき、「今日は、これをやってみましょう。」「ここまでできれば、合格です。」と、提示してきた。今何をすればいいのか児童が分かると、短期目標が決まり、実践しやすそうだった。高学年児童には、自立を促すために、「どんな決定でも受け入れます。自分で決めましょう。」と話してきた。これを話すときには、保護者の理解が必要だ。児童に行動を選択させることを、理解していただかないと、逆に不信感につながる。船橋市が求めている自立できる人間を育てるために、ときにはその児童の決定に委ねる必要があると考えているからだ。

4 おわりに

以上、主幹教諭の立場で重点的に行ったことを論じてきたが、私一人で行っていることではない。所属職員がチームとなり校長の指導の下実践している。主幹教諭は、その全ての教育活動の要として、課題を見極めながらチーム学校を支えていかなければならない。



持続可能な社会の担い手を育む 社会科学習を目指して

我孫子市立我孫子第一小学校教諭 かみの 神野 ともひさ 智尚



1 はじめに

現在、環境や食料などについての課題が山積しており、行政・企業などのSDGsに関する取組が話題となることが多くなった。そのような時代にあって、小学校社会科の産業学習では、児童がこれからの発展について自分の考えをまとめることが求められている。しかし、学習したことをもとにしていても、「発展」について自分事として考えることは難しい。そのため、児童が持続可能な社会の担い手として、多角的に自分の考えがまとめられるような学習を充実させる必要があると考えた。

本稿では、第5学年で実践した水産業単元について紹介していきたい。

2 教材開発の視点

過去の水産業単元の実践では、単元の「まとめあげる」場面で、従事者不足や漁獲量・消費量の減少などの課題を捉え、自分の考えをまとめさせていた。そのため、「どうしていけばよいのかはわからないけれど大変な状況だということがわかった」という児童が多くいた。そこで、課題を乗り越えていけると児童が実感できるような取組を扱った単元を構想すれば、これからの水産業に希望が持てたり、水産業をよりよくしていこうと考えられたりする児童を育めるのではないかと考えた。

そこで、教材を吟味する視点として、①実際に取り組む人の姿が提示できること②よりよい社会のイメージを具体的にもてること③自分たちの生活との関わりを見出せることと

した。この視点から、水産業の課題を解決しようとしている事例として閉鎖式循環型陸上養殖（以下、陸上養殖）を扱い、FRDジャパンの宮川氏を提示することにした。



写真1 閉鎖式循環型陸上養殖の様子



写真2 FRD ジャパン宮川氏

もちろん、陸上養殖をしていればすべての課題が解決するわけではないが、陸上養殖は今までの養殖漁業の枠組みを変え、生産量減少などの課題を解決できる可能性のある漁業形態である。これからも魚を食べ続けていくための方法の一つとして教材化を試みた。

3 単元構成の工夫

水産業は我々国民の食料を確保する重要な産業の一つであり、これからの水産業の在り方を考えることは他人事ではない。本実践では、この点を十分捉えさせ、現状の取組につ

いて、これからも魚を食べ続けるための良さと課題を整理するとともに、自分ができることを考える場面を設定した。学習計画をもとに現状の取組を調べ、生産者の工夫や努力を踏まえた上で、その良さと課題を整理する。

単元全体の構成では、単元を貫く学習問題を設定し、これからの水産業の在り方を追究していけるよう工夫した。また、学習問題の中に持続可能性に関わるキーワード（「これからも」など）を取り入れることで、考える視点を明確にした。発展を考える上で視点となる効率性や有限性に関わるキーワード（「限られる」など）は板書に明記していくようにした。

4 指導の実際

1時間目に2048年に日本の漁業が成り立たなくなる可能性を示し、給食を例に魚介類（出汁含む）が食べられないことを想起させた。このことから、単元の学習問題が「これからも魚を食べ続けるためには、どのように取り組んでいけばよieldろうか。」となり、獲りすぎを防ぐ工夫、捨てられている魚の活用方法、魚を増やす取組について調べる計画を立てた。授業後、「魚が減っているのは少し知っていたけど、こんなに深刻で驚いた。」「今後も魚を食べたいから何かできることをしたい。」などの学習感想が挙がった。

2～5時間目には、漁業の工程や協力関係、技術の向上などに着目して、獲りすぎないためのルールや決まり（200海里、漁業法改正、海のエコラベルなど）を作り守ったり、未利用魚の活用や栽培漁業、養殖漁業、陸上養殖に取り組んだりしている人々の姿に迫った。特に、陸上養殖では、FRD ジャパンの宮川氏へのインタビューを通して、自然環境に近い条件で効率良く生産できるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりしているこ

とを理解することができた。

6・7時間目には、それぞれの取組の良さや課題を文や表にまとめる中で、生産者の立場から水産業に関わる人々の工夫や努力を整理した。さらに、消費者の立場から自分が関わられることを考えた。この学習活動を通して、水産業が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解していった。学習感想には、「魚を食べ続けるために一人一人が協力していく必要がある」というものが多かった。

5 成果と課題

本実践を通して、児童が持続可能な社会の担い手としての立場に立ち、多角的に自分の考えがまとめられるような学習を充実させるために、①課題解決への切実感、②現状の理解、③解決を試みる人の営みへの共感的な理解、④実現性などの視点を取り入れた学習問題、⑤未来について考える場面の設定などが重要だということがわかってきた。

一方で、消費者としてできることは限られているため、本単元で選択・判断の場面は設定せず、水産業の発展について考える場面に留めておくべきだったと感じる。

6 おわりに

拙い実践を紹介させていただいたが、どんな学習も前提は学習指導要領で示されている目標を達成することである。まずは、教科書や資料集、副読本を分析することから教材研究をスタートしていきたい。そして、どのような手立てを講じたり、資料を提示したりすれば学習指導要領の目標を達成することができるかを考え続けていくことが重要である。

本稿が持続可能な社会を担っていく児童や社会科授業とともに励んでいる先生方の一助になれば幸いである。



専門性を生かした 食育のコーディネーター



柏市立柏の葉小学校栄養教諭 むらなか めぐみ 村中 恵

1 はじめに

本校では学校食育の第一目標である「子供の望ましい食習慣の形成」を掲げ、年間計画のもと栄養教諭を中心に食育を進めている。栄養教諭は食育の実施主体として取り組むだけでなく、コーディネーターとしての役割も担っている。今回はその一部を紹介したい。

2 柏市歯科医師会と連携した食育

○道徳教育との関連を持たせた食育

2年生の道徳で節度・節制に目を向ける授業に関わることがきっかけで、3年前より柏市歯科医師会の方々と連携して食育を進めている。

本校での歯科指導と食育の状況について協議し、歯科医の方々よりアドバイスをいただきながら「かむかむメニュー」を考案し給食で提供している。

これらの活動は柏市歯科医師会のYouTubeにもアップし、地域や家庭に向けても発信している。

今年度は「よくかむとどんないいことがあるのかな」という学級活動の授業を歯科医と栄養教諭と一緒に授業を行った。栄養教諭は実際に「よく噛んでみる体験」を行い、だ液や口・歯の様子から、「よくかむこと」の大切さを伝えた。歯科医からは歯の大切さやかむことの必要性などについてお話をいただいた。

この授業は市内の学校でも実践され、広がりを見せている。



3 カリキュラムマネジメントと食育

○生きた教材の提案

食に関する指導の内容は、教科横断的な視点から教育課程を編成することが求められている。

各教科での食に関連した単元に関わる際には、栄養教諭は単元のねらいや評価について十分理解することが大切であり、学年や学級の実態を把握したうえで指導案の検討を行っている。

小学5年生家庭科「3つの食品のグループとそのはたらき」では、当日の給食で使われている食材を用意し3つの食品のグループに分け、食品のはたらきを理解したうえで、さらに自分なりに朝食メニューを考える授業を行った。

栄養教諭が関わる授業では、できる限り生の食材や動画をもとに体験を取り入れるよう提案している。また、他教科・領域、既習事項とのつながりや家庭生活がより豊かになることに重点をおいて指導案を検討している。

この授業の実施後には、自分の食生活を振り

返り、保護者や調理員に感謝の気持ちを持ったり、自分で朝食を作ったりする児童が増えた。

4 経験者研修等における栄養教諭の役割

経験の浅い教員が増えている中で、若手研修や経験者研修に向けた食育を進めている。今年度は教科における食育の検討や給食時間の指導など、連携を図りながら進めてきた。

学級の実態や、担任の目指す児童像から、指導事項や評価内容について十分に話し合い、計画を立てて進めた。さらに栄養教諭は調理員とも連携を図り、動画や具体物等指導資料の作成および指導を行った。

栄養教諭は専門的な知識のもと、担任が必要としている教材を作成して効果的な食育を進めることができた。その一例として、3年生のあるクラスで、給食の献立作成や調理の工夫点や給食残渣削減、配膳の仕方の見直しなどについて、朝学習の時間や給食時間の直前に食育の授業を毎週1回継続して行った。

その結果、食の大切さを知り感謝の念を持って、自らが給食の時間に目標を立てて取り組めたという実感につながり、「自己肯定感」の向上に繋がっている。

5 味わうことの大切さを学ばせる

子供の味覚が発達する成長期に、給食の様々な料理や食材を「味わわせること」も栄養教諭の大切な役割である。

しかし、子供達に給食の感想を聞くと「〇〇がおいしかった」という声は聞かれても、どのように美味しかったのかという言葉は少ない。また給食の時間に教室を回っていても名前を知らない食材が多いことが気になる。

そこで、給食を味わって食べ、味わいを言葉にする味覚教育の取組を行った。

学級数が多いため、どの学年でも簡単に

きるものとして、1回の給食で2種類のぶどうを出して、味わった感想をクラスごとにカードに記入することとした。

五感を生かし味わい「言葉に表現する」ことは、食べることと向き合い給食に関心を持つことにも繋がる。ぶどうが苦手でも味わいの比較をカードで伝えている児童もいた。また自主学習でぶどうの見え目や食感、味などの比較をまとめていた児童も見受けられた。

小学1年生の国語「ことばでつたえよう」では給食をテーマに文章を書く予定である。今回の取組で味わった感想を言葉にすることは語彙力や表現力を上げていくことに繋がるため、今後も継続して取り組んでいきたい。



6 終わりに

食育のコーディネートを進めるにあたり、先生方と「目指す児童像」を共有し、「子供の資質・能力の向上」を育むというカリキュラム マネジメントの観点から、子供の実態に合わせた授業や指導方法を検討していくことが重要であるということ学んだ。

今後も栄養教諭は学校と地域・家庭がチームとして継続した食育に取り組めるよう、「チーム学校」の中核としてのコーディネイトに努めていきたい。



学校で伸びる

3年目を迎えて

君津市立小櫃小学校養護教諭 かみこ 神子 なつほ 夏穂



養護教諭になり今年で3年目となる。私は子供の頃から健康であることが取り柄で、風邪をひくことも怪我をすることもほとんどなく、保健室とは無縁の学校生活であった。そのため、まさか自分が「保健室の先生」になるなんて思いもしていなかったが、今では養護教諭の仕事に魅力とやりがいを感じている。多様な健康課題を抱える子供たちと関わる中で、保健室はどのような場所であるべきか、日々模索している。学校の中ではあるが、教室とは違った空間であり、心身の不調を訴える場だが、病院とも違う場所である。ある時、低学年児童が指の痛みを訴えて来室をした。痛みのある部分を確認すると出血や腫れなどの外傷はなく、話を聞いたが怪我をした様子もなかった。手当ての必要はないと思ったが、児童が不安そうな表情をしていたため、話を聞きながら絆創膏を貼った。すると「保健室の先生ってすごい！痛くなくなった！」と一瞬で笑顔になり元気に教室に戻って行った。1枚の絆創膏と話を聞くことが、その児童にとっては必要な手当てであった。教室や病院とは役割の違った「保健室でしかできない手当て」があることを児童から教えてもらい、また養護教諭の魅力を実感した。養護教諭の職務は思っていた以上に多岐に渡り、悩むこともあるが、あらゆる経験を自分の成長の糧とし、日々成長していきたい。そして子供だけでなく教職員や保護者からも信頼される養護教諭を目指していきたい。



学校で伸びる

あの一言で……

市原市立八幡中学校教諭 いちかわ 市川 りえか 梨恵香



教員生活3年目、とある先輩のあの一言で私の教師としての考え方が変わる。「さっきのあなたに教わった子供たちは、何かを得ることができたのかな……」その一言は私にとって大きな衝撃となった。この言葉の真の意図を考え、落ち込む日もあった。しかしある時、私は気づいた。その先輩の考えには常に「生徒」が主語となっており「生徒をどのように育てたいのか」という思いが根本にあったことを。先輩にご指導を受けてから、これまでの自分がいかに何も考えずに生徒と接していたか気づくことができたのだ。その日から私は教師としての立場や、子供を育てるために何をすべきか、それまでの何十倍も考えるようになった。そして私に明るい希望の光が見えた。

私たちの職場だけでなく、現代社会では〇〇ハラというパワーワードに敏感になりすぎて、自分にとって厳しく感じたり苦しく感じたりすることのすべてが、まるで「悪」のように取り扱われることがある。時に厳しく指導を受けることに批判的になる若手も少なからずいるのではないだろうか。

当時、私にとって、とてつもなく厳しく感じたあの一言のおかげで、教師として大きく前進することができた。今では先輩に大変感謝している。まだまだ未熟者ではあるが、私も先輩のように「自ら気づかせる一言」を自然に発することができる教師になりたいと心から思う。



『おたがいさま』のチームワーク



長柄町立ながらこども園園長 かわしま しずお 川嶋 静雄

1 はじめに

本園は、平成22年4月1日、長柄・三島野保育所、水上幼稚園が統合し開園した。身近な子育てのパートナーとして、保護者の役に立ちたいという思いを大切にしながら、日々の教育・保育を実践している。

本園には、子育て支援センターが併設され、親子で安心して遊べる場、地域の人と出会える場、情報交換や相談の場を提供し、未就園児の様々な子育てニーズに応えている。

2 何をするにも『楽しく』

めざす園児の姿は、「元気な子、興味関心を持つ子、やさしい子」である。合言葉を「あいさつ チャレンジ えがお」とし、「元気いっぱい、やる気いっぱい、優しさいっぱい」の子どもになってほしいと願っている。

楽しいこども園となるために、四季折々の行事を計画・実施し、何をするにも『楽しく』を心がけ、子どもと保育者が一緒に楽しんでいる。また、ALTによる英語活動や外部講師によるボール遊び教室等も取り入れ、充実した園生活ができるよう、子どもたちが夢になって遊ぶ環境作りを目指している。

3 『子どもファースト』の関わり

年度初めに職員としての心がけについて共通理解を図っている。①子どもファースト、②職員の和と協力関係、③笑顔とあいさつ、④言葉づかい、⑤動作・姿勢、⑥ハウレンソウとオアシスの態度・習慣、⑦保護者との連携の7つである。特に『子どもファースト』では、子どもの言動を先入観で決めつけないで、一人ひとりに応じた関わりを大切にしている。

また、つくも幼児教室、こどものひなた、東上総教育事務所、長生特別支援学校、千葉聾学校等の関係機関と協力連携し、子どもの支援体制を整えるために、アドバイスを受けながら、教育・保育に生かしている。

4 『おたがいさま』のチームワーク

保育者一人が、安全に何人の子どもを同時に見られるだろうか。乳幼児の行動は予測がつかず、常に細心の注意を払い、一時も気の休まる時はない。

保育はチームプレイである。常に子どもたちの安全に気を配りながら、より良い保育を行うには、職員の連携・協力体制が不可欠である。そのために、『おたがいさま』の気持ちで、気軽に相談し協力し合える、そんな風通しの良い、楽しく学び合える園を目指している。

5 『安全最優先』で命を守る

台風13号の大雨では、2019年の房総豪雨の教訓から、前日に登園自粛を要請した。しかし、無理に登園する保護者も見られ、休園の判断も必要であると痛感した。安全優先で命を守るために見直しをしていきたいと考えている。

6 最後に

保育には、外からは見えない苦労や問題がたくさんある。職員が自分の役割を果たし、労を惜しまない努力によって園の運営や、未来を担う子どもたちのその子らしい育ちを支えていることを忘れてはいけないと思っている。

特別支援教育課題

願いや思いを将来につなぐ

「キャリア・パスポート」の活用を目指して
-「キャリア・カウンセリング」の視点を反映したキャリア教育-

やまざき ひろゆき
 県立富里特別支援学校教諭 山崎 裕之

知的障害のある生徒の人間関係形成能力や課題対応能力を育てるためには、キャリア・カウンセリングの視点を反映したキャリア教育の必要性がある。本研究ではまず、「富里版キャリア・パスポート」を開発し、検証を重ねながら活用しやすいツールを目指した。これにより、生徒は自分の成長や課題に向き合うとともに、教師に助言を求めたり生徒自身で考えたりすることができるようになった。また教師も、短時間で効率的に対話ができる「ブリーフセラピー」の手法を用いることで、彼らに寄り添った支援ができた。今後も、生徒のキャリア発達を支援するためのツールとして「キャリア・パスポート」が有効活用されることや対話を重視したキャリア・カウンセリングの実践の普及に努めていきたい。

特別支援教育(知的障害)

地域貢献を通じた、

魅力ある学校づくりに向けて

おおや つばさ
 県立市原特別支援学校つまい風の丘分校教諭 大矢 翼

千葉県立市原特別支援学校つまい風の丘分校独自の特色や魅力を明らかにするために、分校として地域のニーズに応じた取組を特色としながら、生徒を対象に地域貢献活動に関する質問紙調査を行い、彼らのアイデアを生かした地域貢献活動を実施した。

地域貢献活動を通して、生徒が他者から認められたり感謝されたりすることで自己肯定感をもち、主体的な姿を引き出すことができたことは、魅力ある学校づくりにつながったものと考えている。今後、この実践を継続していくにあたり、地域のニーズを的確に把握するとともに、管理職や特別支援教育コーディネーター等、多くの教職員の理解を得て、分校がチームとなって取組を進めていく。

企業等派遣

障害者の職場定着を目指した支援の在り方について

-就労の定着にむけた基本的な力の育成に向けて-

ももせ ふくたろう
 県立大網白里特別支援学校教諭 百瀬 福太郎

厚生労働省の調査によると、障害者の就職件数は9年連続で増加している。一方で、1年後の職場定着率は58.4%となっており、半数近くが離職している現状である。本校の高等部を見てみると、これまでは普通科の卒業生の離職が目立っていた。しかし、県立障害者高等技術専門校（以下技専校）に入校し、そこから就職をした卒業生たちは、離職することなく、職場定着を果たしている。本研修では、各職業訓練を経験し、障害のある方が就職をする際の基礎知識や技能について学んだ。研究では、技専校の訓練を経て就職すると、なぜ職場定着に結びつくのか、その理由を明らかにした。研究の結果は、特別支援学校高等部の進路指導や、小学部段階からのキャリア教育に生かせるものと考えている。

企業等派遣

視野の拡充と発想力の習得を 企業努力の観点から学ぶ

松戸市立松戸高等学校教諭（前県立流山南高等学校教諭） は せ が わ りゅうのすけ 長谷川 龍之介

私は一般企業に勤めることもないまま、教員の道へと進んだ。業務をこなしていると、自身の視野の狭さに気付いた。また、一般企業に勤務経験のある同僚が物事を柔軟な思考で捉えていることに何度も感銘を受け、柔軟な発想力を養いたいと考えるようになった。そこで、一般企業に勤務することで、自身のスキルアップに繋がると考え企業研修をさせて頂いた。株式会社高島屋柏店で4ヵ月間、主に販売員として勤務したことで様々な能力の向上や獲得をすることができた。特に、お客様に対してのサービス精神を学び、生徒には手厚い指導や援助、積極的な提案を、保護者にはこまめな連絡や報告により教育の質の向上を重点として還元していきたいと考えている所存である。

教育臨床

教員の「遊び心」のある関わり

船橋市立三咲小学校教諭（前二和小学校教諭） すずき ともみ 鈴木 智実
 市川市教育センター副主幹（前富美浜小学校教諭） しおはら あゆみ 塩原 歩
 印西市立木下小学校教諭（前西の原小学校教諭） おおば ひろゆき 大場 裕幸
 いすみ市立大原中学校教諭（前国吉中学校教諭） かじ ゆりこ 梶 祐梨子

教員の「余裕・ゆとり・ユーモア」といった「遊び心」のある日常的な関わりは、児童生徒が安心して快適に過ごせる学級の雰囲気と関連があるのではないかと考え、その効果を明らかにするために、学級の観察や児童生徒へのアンケート、教員への半構造化面接での回答を基に分析を行った。分析により、観察でみられた教員のユーモアある声かけや興味関心を引きつける話題の提供、児童生徒との対話等の関わりは、児童生徒の安心感の醸成や意欲の向上等に影響をもたらす可能性があることがわかった。さらに、教員自身も大らかな気持ちで児童生徒と向き合えるという相互作用も期待される。今後は、研修会等で研究成果を広めると共に、多様な環境、実態での事例を通して、より深い効果の検証を進めたい。

特別支援学校のICT・支援機器の活用と センター的機能の充実



にしはら かずま
西原 数馬
県立松戸特別支援学校教諭

1 はじめに

本校は東葛飾地区唯一の肢体不自由教育単独校である。本校に在籍する児童生徒の教育を行うと共に、センター的機能¹を発揮し、小中学校等における肢体不自由教育の推進を図っている。以下、校内及びセンター的機能での実践事例を紹介する。

2 本校内の実践事例

(1)スイッチの活用

肢体不自由のある児童生徒がわずかな手や身体の動きで機器を操作できるよう、一人一人に応じたスイッチを活用している。スイッチを使って電化製品をオン・オフできる「ウゴキング」という機器や、乾電池をオン・オフできる「マビー」という機器も使っている。これらの機器により、図画工作・美術で電動のはさみを動かして紙を切ったり、理科で植物の水やりを行ったり、音楽では楽器を演奏したりすることができ、障害の重い児童生徒の主体的な学びにつなげている。



各種スイッチ（左）と朝顔の水やりでの活用例（右）

(2)視線入力装置の活用

目を動かすことが得意な児童生徒の場合、視線入力装置も活用する。「視線入力」とは、

視線でアイトラッカーに入力することでパソコンやタブレットを動かす入力方法である。



視線入力による学習
(ソフトはEyemot3D「ひらがな表」)

(3)VOCAの活用

発語が難しい児童生徒は「VOCA（Voice Output Communication Aid）」を利用して意思伝達をしたり、授業に参加したりしている。

本校で使われている「ビッグマック」等のVOCAは、「おはようございます」などのメッセージを録音しておけば、児童生徒がボタンを押すことで再生できる。一つのメッセージを再生するもの（写真左）から、複数の中から選ぶもの（写真右）まで、様々な種類がある。本校は約30台のVOCAを整備している。



(4)iPadの活用

①肢体不自由児向けに開発された各種アプリを活用している。手や身体に障害があってもわずかな動きで操作でき、学習量を確保できるアプリを選定して導入している。

- ②全校研修会を実施し、iPadのVOCAアプリの活用方法を学んだ。研修後、多くの学級がiPadをVOCAとして活用している。
- ③画面のタップが難しい場合、iPadにスイッチを接続して操作を行っている。



スイッチでiPadのシャッターを押し、写真撮影係

(5) デイジー²の活用

文字を目で追ったり、ページをめくったりすることに困難がある場合、デイジーの教科書や絵本を活用している。デイジー教科書は、製作団体に申請を行って利用している。デイジー絵本は「わいわい文庫」³を活用するとともに、アプリを使って本校教員が自作も行っている。



iPadで「わいわい文庫」を読む

3 センターの機能での実践事例

(1) 出張相談

小中学校等から依頼を受け、本校教員が訪問して助言を行っている。要請のあった児童生徒一人一人のアセスメントを本校教員が行い、個に応じたスイッチ、VOCA、アプリ、デイジー等の活用を提案している。

(2) 電話相談・来校相談

書字やパソコン入力に困っていたり、視線入力装置の活用を検討したりしている肢体不

自由児についての相談を受けている。来校相談では実際の書字やパソコン入力の様子を観察し、適切な機器や支援方法を助言している。

(3) 研修会の実施

県内各地の教育委員会、特別支援学校、放課後等デイサービス等から依頼を受け、講師として出向いたり、本校にて研修会を実施したりしている。

(4) インターネットによる情報発信

本校ホームページで情報発信を行っている（写真上）⁴。また本校で作成した動画が「ちーてれスタディネット」で公開されている（写真下）⁵。



4 おわりに

東葛飾地区の肢体不自由教育のセンターとして今後も専門性向上を図り、本校の実践を小中学校等における特別支援教育の推進にも役立てていきたい。

- 1 各特別支援学校はセンター的機能を発揮し、小中学校等からの要請に応じて電話相談、出張相談、研修会等を実施している。
- 2 デイジー (DAISY) は「Digital Accessible Information System」の略。「誰もが読めるアクセシブルな電子図書」で、文章の読み上げ機能がある他、スイッチや画面のタップでページをめくったりすることもできる。
- 3 伊藤忠記念財団が作成・配布しており、申請すると無償で寄贈を受けることができる。
- 4 本校ホームページのトップから「自立活動部」「教材紹介」を選択すると閲覧可能。本記事に掲載した機器、アプリ等の正式名称や使い方もこのページで詳しく解説している。
- 5 チーてれスタディネットから「特別支援学校・特別支援学級」「R3 自立活動」を選択すると閲覧可能。

教育支援センターの機能を生かした不登校支援の在り方について

県子どもと親のサポートセンター支援事業部

1 研究の目的

令和4年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）」によると、不登校児童生徒数は約30万人に迫っている。学校だけでの対応には限界があり、外部機関による支援のニーズが高まっている中で、市町村等に設けられている教育支援センター（以下センター）の果たす役割は大きい。センターの運営及び実践を整理・分析して、その機能を明らかにし、これからの不登校支援の在り方について考察する。

2 研究方法

(1)研究1

県内にある65か所のセンターを設置する39自治体を対象に、支援体制に関するアンケート調査を実施し、センターが担っている機能を明らかにした。

(2)研究2

研究1の調査結果から、特色のある取組をしているセンターを抽出し、視察及び聞き取り調査を実施して、調査内容を分析した。

3 研究の概要

(1)研究1 センターの実態把握

県内にある65か所のセンターは、広域の複数自治体で所管、近隣市の受入れ可など、その運営体制は様々である。センターの前身となる適応指導教室は、「学校復帰のための指導」を目的としていたが、現在はその対応の幅を広げ、「学校復帰を含めた社会的自

立」を目的としている。全てのセンターにおいて「相談支援」が行われており、利用する児童生徒・保護者、学校のニーズに合わせ、多様な支援を行っている。その支援内容から、センターがもつ機能を①居場所的機能、②非認知能力を育てる機能、③学習支援的機能、④関係機関等連携機能の4つに整理した。（図1）

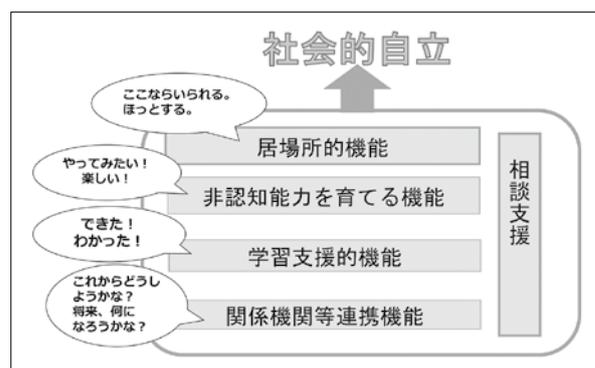


図1 教育支援センターの支援機能

調査結果によると、多くのセンターが、まずは児童生徒が「ここなら居られる」「ほっとする」と思える「居場所的機能」をベースとして、児童生徒の状態に合わせた支援を行っていることがわかった。

(2)研究2

特色のある取組を行っている6センターの実践から

センターの強みや実践について深めるために、特色ある取組を行っているセンターを抽出し、聞き取り調査をした。

①ニーズに合わせた場を選択する機会の提供

【Aセンターの特色】

居場所的機能に重点をおいた場と、学習

支援的機能（授業形式に近い小集団での学習支援）に重点をおいた場を別フロアに設置することにより、児童生徒が活用する場を選択できるように運営している。また、同建物内に設置をすることで、段階に応じて併用もしくは移行し、継続的な支援を展開できるよう工夫されている。

【Bセンターの特色】

1 自治体で4か所のセンターを設置し、センターごとに異なる取組が実施されている。対象地域内に居住している児童生徒はそのニーズに合わせてセンターを選択することができる。あるセンターでは学習の時間が明確に設定されているが、他では学習時間の設定はなく、その日の活動を児童生徒自身が決めて活動できる、自由度の高い支援が提供されている。

【Cセンターの特色】

訪問相談員を配置することにより、センターに通所できない児童生徒に対しては、アウトリーチ型の支援が行われている。訪問相談員がセンターの相談員も兼ねており、児童生徒が通所できるようになった際、安心感をもって利用することができる体制がつくられている。

②「個」へ関わりの重視

【Dセンターの特色】

通所児童生徒それぞれに担当を付けることで、安定した二者関係の構築ができる体制づくりがされている。常に寄り添う大人がいる安心感をもって利用できることに重点が置かれている。

③他機関との連携・協働

【Eセンターの特色】

センターが子育て支援の一機関として位置づけられており、0歳から18歳まで継続的な支援が可能となる体制づくりがされて

いる。児童家庭支援センターや民間団体と連携し、幅広い支援が展開されている。

【Fセンターの特色】

近隣のセンターが集まり、ケース会議や情報交換、研修を実施するネットワークが構築されている。互いの取組を知ることで、不登校支援の新たな視点やそれぞれが抱える課題解決の一助として機能している。

4 研究のまとめ

どのセンターも、まず児童生徒にとっての居場所となることを大切にしており、居場所を確保することで、安心して次の活動へ進められるよう運営されていた。

しかし、多様なニーズに対する個別の支援をセンター単独で行うことは難しく、各センターがもつ強みや課題を認識した上で、他機関との連携や、各センター間における相互補完により、その支援力の向上が期待できる。そのためには、各機関の強みを正しく知っておくことが不可欠であり、子どもと親のサポートセンターがもつセンター的機能の強化を図りながら、教育相談ネットワークを通じて、県と市町村等との連携・協働をさらに促進していく必要がある。

5 おわりに

これからの不登校支援では、学校も含めた、多様な教育を選択できる機会の提供が求められる。校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）の整備もその一つであろう。その際、学習支援のみならず、センターで支援のベースにしている「居場所的機能」をより意識した運営を行うことで、これまで以上の支援が期待できる。

令和6年度新規研修事業等の紹介

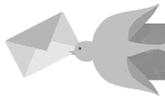
県総合教育センター

令和6年度の新規研修事業及び目玉事業を紹介します。詳細は「令和6年度研修事業一覧」を御覧ください。

総合的な探究の時間実践研修<推薦・希望>	
(目的) 思考ツールやICTを有効に活用した講話・演習等を行い、探究的な学習の理解を深めるとともにPBL (Project Based Learning) の実践を通して、総合的な学習の探究の充実に資する。	(対象) 県立高等学校・市立高等学校から推薦された校内で総合的な探究の時間を担う教諭47名、高等学校・特別支援学校（高等部）の教員33名
総合的な学習の時間実践研修<希望>	
(目的) 思考ツールやICTを有効に活用した講話・演習等を行い、探究的な学習の理解を深めるとともにPBL (Project Based Learning) の実践を通して、総合的な学習の時間の充実に資する。	(対象) 小・中・義務教育学校・特別支援学校（小・中学部）の教員80名
成長期に学んでおきたい保護者とのよりよい関係づくり研修<希望>	
(目的) 保護者からの学校や教員に対する意見や要望等に対応する際に必要な資質及び実践力を身に付ける。	(対象) 採用から5年目までの幼稚園・認定こども園・小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の教員200名
幼保小の架け橋プログラム研修<希望>	
(目的) 幼保小の架け橋期に育成する資質・能力と教育のつながりの理解を深め、幼児教育及び生活科指導実践例、遊びに使うおもちゃ作り演習を通じて、架け橋期の指導力の向上を図る。	(対象) 保育園、幼稚園、こども園、特別支援学校幼稚部の教員、小学校・特別支援学校（小学部）、義務教育学校の教員40名
「学校教育と生成AI」研修<希望>	
(目的) 生成AIの仕組み及び特性を理解した上で生成AIの活用方法を学び、授業実践力の向上及び校務処理等の効率化を図る。	(対象) 生成AIを利用することにより、授業や校務処理等の改善を図りたいと考えている公立の小・中・義務教育・高等・中等教育・特別支援学校の教員40名

情報アラカルト

理科専科パワーアップ研修<推薦>	
<p>(目的) 小学校で理科の授業を行う上で必要な基礎的知識や備品等の設備整備に関する基本的な考え方等について学ぶことにより、児童にとってより有意義な理科授業の充実を図る。</p>	<p>(対象) 小学校で理科専科を担当する教員で各教育事務所長の推薦する者 ※対象に義務教育学校（前期）の教員も含む ※令和5年度に本研修を受講した者を除く</p>
幼児教育アドバイザー派遣	
<p>(目的) 県内の幼児教育の充実を図る・園内研修、市町村における幼児教育や幼保小の円滑な接続に関する研修講師、指導や助言・市町村の幼児教育体制の推進・人材育成、園経営の改善</p>	<p>(対象) 県内すべての幼稚園、こども園、保育園、小学校、義務教育学校、特別支援学校（幼稚部、小学部）、市町村関係各課</p>
学校等支援事業 特別支援教育基礎コンテンツ	
<p>(目的) 基本的な知識や実践例など役立つ情報を各コンテンツに掲載し、教職員や行政関係職員等が自己研修等で活用する。</p> <p>(内容) 自閉症、発達障害、視覚障害、知的障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障害、高等学校用、幼児版の合計10コンテンツがある。今年度、自閉症と発達障害コンテンツの改訂を行った。</p>	<p>(対象) 千葉県内の教職員 行政関係職員等</p> <p>(申込方法) メールによる申込み</p> <p>(メールアドレス) sosetokusi@chiba-c.ed.jp</p>
調査研究事業 知的障害教育における学習評価から授業改善につなげるフレームワークに関する研究成果の周知	
<p>(目的) 令和4年度、5年度の調査研究事業で開発した「知的障害教育課程の授業改善アシスト」の活用に向けて、教職員や行政関係職員等に研究成果の周知を図る。</p> <p>(内容) 推薦研修において成果物を活用した演習を行う。受講者は、学校や各地域等で伝達講習を行う。</p>	<p>(対象) 千葉県内の教職員 行政関係職員等</p>



頼りになる「千葉教育」



とみなが やすお
鋸南町教育委員会教育長 富永 安男

1 教育情報誌の最先端に行く「千葉教育」

(1) シリーズ現代の教育事情

私自身も現役教員のころ、「教育情報誌」の雄として大変お世話になった。現在は「シリーズ現代の教育事情」と称し、年間6回の特集を組んでいる。今年度蓮号の特集、「千葉の教育150年」は、「千葉教育」の歩みを振り返るとともに、考えさせられることが多く、重厚な内容で感銘を受けた。次年度もこの意気度攻めの「千葉教育」を期待する。

(2) 一読者として思ったこと

内容が年々充実しているのは、読者アンケートの結果を踏まえ、十分に検討しているからであろう。特に、「学校を創る」と「授業を創る」は、多くの教員の貴重な情報源となっている。「学校NOW!」も充実している。

また、各界の第一人者がお書きになる「提言」は、《目から鱗》の思いである。教員以外の方から学ぶことが一番大事だと考えている私は、毎回楽しみにしている。

以下に印象深かった言葉（抜粋）をあげる。

- 子供の成長や将来への期待は、学びへの期待でもある。－中略－学びへの期待はヒトの本質といえる。(桜 No.679号)
- スポーツと教育がとても密接だということです。(菊 No.682号)
- 学校教育で重点的に指導していただきたいことを三つ提言します。一つ目は国語（日本語）です。二つ目は歴史です。三つめは道徳です。(梅 No.683号)

2 総合教育センターの優れた研修企画

カリキュラム開発部担当の「出前あすなろ

塾」と「出前中堅教員サポート塾」、更には「いつでも どこでも オーダーメイド研修」は優れた研修企画である。総合教育センターの職員が外に飛び出して教えてくださっている。

また、教育の情報化に関する内容についても、積極的に講師派遣を行っている。素晴らしいことである。

研修終了後に、次の様なアンケートを実施している点も評価したい。

- ①本日の研修は満足のいくものでしたか。
- ②研修内容を今後どのように生かしていこうと思いますか。
- ③今後学びたい事があれば記入して下さい。
当町でも次年度は是非実施したいと考えている。

3 AIと総合教育センター

「教育は人なり」である。どんなにAIが学校教育を席卷しようとも、最後の落としどころは教員による有難い話ではないか。

その研究はカリキュラム開発部にお任せするとして、「英会話や事務作業、プログラミングはAIが担うが、これからは知識力や計算力ではなく、《問いを立てる力》《編集力》《創造力》《表現力》が必要。」(週刊東洋経済11/14 AI時代の子育ての教科書より)とあった。

全く同感である。更には、向上を目指す前向きな意欲とやる気、粘り強さ、自己肯定感、コミュニケーション力、欲求や感情の自己調整などの非認知能力の育成が重要である。

これらの力が備われば、社会の変化に対応できる力が身に付くであろう。総合教育センターの今後益々の発展に期待している。

我が校の働き方改革 ～部活動の代替案 放課後教室『学びま専科』の実践を通して～

一宮町立一宮小学校校長 ながの まさと 永野 真仁



1 はじめに

話は令和元年、コロナ禍前に遡る。実効性のある「働き方改革」を行うためには、小学校における各種大会、部活動の見直しが必須であるとの考えから、長生郡市校長会の諮問機関として「行事検討委員会」なるものが組織された。当時の長生地区小学校では、陸上競技大会をはじめ、水泳、ミニバス、サッカー、体操、ダンス、音楽発表会が実施され、加熱の一途を辿っていたこともあり、本当に改革が進むものかと疑問視する声もあった。

委員会では、小学校における各種大会のあり方について数回にわたり議論を重ね、要望書としてまとめたものを全校長で内容（陸上と音楽会以外は廃止）を確認した。これを校長会長の名前で長生小中体連をはじめ関係団体に提出した。その後は紆余曲折があり、ここに来てようやく各種大会、発表会のあり方も見直され、廃止、規模縮小が進んできた。

2 代替構想について

当時、校長会長からは、「我々の代が矢面に立って改革を……。」との発言があったが、実際は、その後に残された我々こそ矢面だと考えていた。なぜなら、我々の目の前には子供たちと保護者の存在があり、簡単にバッサリと切るわけにもいかないからである。報道等を通じて、職場としての学校のブラックな部分が世間一般に知られるようになった。しかし、「働き方改革」という言葉で全てを切り捨てるのは到底理解が得られるものではな

い。事実、大会が廃止となっても、部活動の存続を望む声は多く、容易ではないと感じた。

そこで、本校では、段階を踏むためにも、部活動廃止後の代替構想について次のような内容で、「学校だより」を通して示していった。

部活動の廃止により、これまで練習に充てていた放課後の時間の使い方について次のような構想を練っている。

文科省からは、小学校高学年において、今後、教科担任制の導入が打ち出されている。本校では、これまでも教員の教科・領域における専門性を生かして、学年内を中心に交換授業を実施し、中学校の教科担任制へのスムーズな移行を目指してきた。全学年が3学級あり、本地区では比較的規模の大きい学校だからこそできる工夫である。

さらに、週2回程度、対象は高学年児童の予定であるが、子供たちの興味・関心、幅広いニーズに応じて様々な放課後教室のコマを組み、自由に発展的な課外授業が受けられるように整えていく。ここでも担任以外の教員との関わりを意図的に持たせることで、いわばプレ教科担任制を体験させることができるものとする。

上記のように「働き方改革」というワードには敢えて触れず、「子供たちと向き合う時間の確保」と、「教科担任制の準備」を前面に打ち出し、説明を重ねてきた。

そして、コロナの影響で当初の計画から1年遅れとなった令和4年6月、5・6年生を対象に週2日、「算数」、「造形」、「ダンス」、

「プログラミング」、「金管楽器」、「スポーツ」の6教室から2教室を選択できるシステムで放課後教室『学びま専科』をスタートさせた。これに合わせて、既存の水泳、ミニバス、サッカー、体操、金管の部活動を廃止した。

この取組が、「部活動から専科へ」と題して、千葉日報の一面トップ記事となり、総セをはじめ、学校、地教委等から多くの問い合わせをいただくなどの反響があった。

しかし、『学びま専科』をスタートさせたことで、教員の新たな負担を生んだのでは本末転倒である。スタート段階の6教室については見直しを図り、令和5年度の『学びま専科』は、2教室を減じて、「算数」、「ダンス」、「プログラミング」、「自由遊び」の4教室とした。また、コロナ禍明けとなり様々な学校行事が復活する中、放課後の時間帯は行事の準備に駆り出される児童も多く、『学びま専科』の実施期間については秋季運動会の準備が始まる前に終了とし、負担軽減を図った。

3 今後の方向性

本校の喫緊の課題は学力向上である。それも、実効性のある取組とするため、次の2点について推進している。本年度より、学校全体の研究教科を「算数」とし、子供たちにとって「わかる喜び」や「学ぶ楽しさ」が味わえるような指導の工夫について、授業実践による検証を重ねていく。このことにより、教員の確実な指導力向上を目指すものである。

また、中・高の免許をもつ教員や、長期研修生として、総セや大学等で専門性を高めた経験のある教員も多く配置されている。そんな、個々の教員の専門性を最大限に生かした交換授業（専科授業を含む）を積極的に取り入れていくため、学年内のみならず、学年を越えた縦割りの交換授業を積極的に取り入れ

るようにした。つまりは、「教科担任制の準備」がまた一步進んだものとする。

このタイミングに合わせて『学びま専科』は、教室数の削減、期間の短縮を図った。今後の方向としては、「教科担任制の準備」が整うにつれ、『学びま専科』は縮小、廃止に向かうことを想定している。

また、当然のことのように地域行事への参加を求められてきた伝統のマーチングバンドは、長らく活動もなく、ベースとなる金管部の廃止により存続が不可能となった。コロナ禍前は、多くの授業時数を割り、夏休みにも子供たちを集めて練習してきた。地域行事への参加意義を否定するものではないが、授業時数の確保は最優先としたい。今後は、正課音楽の時間内で、無理なく取り組んだ合奏や合唱での参加に向け調整を図る予定である。

4 おわりに

令和5年8月には、中教審の緊急提言がなされ、教員の働き方をめぐり、危機的な状況にあるとし、地域への業務分担や教科担任制実施の前倒しについても盛り込まれた。

長生地区では、話題とすることがタブーとされた各種大会の在り方に初めてメスを入れた。本校では、この機を逃さず部活動の廃止に踏み切り、職員は、部活動の無い毎日をごろしている。本来、「働き方改革」について保護者、地域の理解が深まり、協力のもと進めることこそが理想的な形であろう。しかし、待ったなしの状況にあった本校では、代替プランを示し、部活動を廃止したことで、一定の成果を挙げている。まだまだ完成形とは言えない体制ではあるが、今後も、子供たちと向き合う時間を確保し、豊かな学びを保障するためチーム一宮、知恵を出し合い、より良い方向性を見出してくれるものと期待する。

【連載・県立高校の今】 第6回（最終回）

船橋高校（理数教育の拠点校）、松戸向陽高校（福祉教育コンソーシアム）
匝瑳高校（総合学科）、銚子商業高校（通信制協力校）

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

1 はじめに

今回は(1)理数教育の拠点校、(2)福祉教育に係るコンソーシアム、(3)総合学科への改編、(4)通信制協力校への指定の4項目について、概要と各校の取組を紹介する。令和6年度から新たな学びが加わる学校を紹介する「連載・県立高校の今」は今回で最終回となる。

(1)理数教育の拠点校について

理数科では、様々な事象に関わり、数学的・理科的な見方・考え方を組み合わせるなどして働かせ、探究の過程を通じて課題解決のため必要な資質・能力を育成することを目指しており、令和5年現在、県立高校では船橋、柏、木更津、佐倉、佐原、匝瑳、長生、成東の8校に設置されている。令和6年度から船橋高校を理数教育の拠点校とし、理数教育連携事務局を設置する。

(2)福祉教育に係るコンソーシアム

本県では農業教育に関して「アグリサポーターズちば」、工業教育に関して「工業系高校人材育成コンソーシアム千葉」のコンソーシアムを設置し、産・学・官が相互に連携することで、教育の向上を図っている。令和6年度には松戸向陽高校を中心とした福祉教育に係る「千葉県福祉系高校人材育成コンソーシアム（仮称）」が新たに加わる。

(3)総合学科への改編について

匝瑳高校には普通科と理数科が併設されているが、生徒の多様な進学希望に対応し、大学卒業後の就業までを見通したキャリア意識の高い人材を育成するため、普通科と理数科を改編し、総合学科を設置する。

(4)通信制協力校について

本県唯一の公立通信制高校である千葉大宮高校では、生徒は普段は自宅で学習し、学校にレポート課題を提出し添削を受けるほか、スクーリング（面接指導）や定期試験のために通学することで、学習を進めるが、千葉市に所在する千葉大宮高校が遠い生徒にとっては、通学が負担となる。

そのため、千葉大宮高校から遠距離にある高校でスクーリングや定期試験が受けられるよう通信制協力校を指定している。令和6年度から現在の館山総合高校に加え、銚子商業高校が協力校に加わる。

2 船橋高校の取組

(1)拠点校設置の目的と運営体制

理数科を設置する県立高校8校（以下、理数校）が協力し、研究機関や大学（以下、外部機関）及び小・中学校との間で理数関連の取組を通じた連携を推進することで、県全体の理数教育の充実を図る目的で、事務局を本校に置き、理数校が協力して運営していく。

(2)具体的な取組と計画

①千葉県課題研究発表会の開催

理数校が力を入れて取り組んでいる生徒の課題研究の発表及び交流の場を提供する。互いの研究について質疑応答したり、議論したりすることで、自らの研究をより客観的に捉え、深めていく機会とする。

②サイエンススクールマグネット千葉の運営

理数校（SSH校を含む。）を地域の拠点として、地域内の小・中学校との連携強化、理

数教育の普及を目指す。児童生徒を対象とした出前授業や実験教室などの交流会を通じて理数に興味を持ってもらう機会を提供する。

*サイエンススクールマグネット千葉とは
県立の理数校8校に市立千葉、市立銚子、市川学園、芝浦工大柏を加え、児童生徒向けの理数教育普及の活動を企画・運営する組織である。(以下、SSマグネット)

③理数教育に関する広報と外部機関との連携
県全体での理数教育の振興を図るため、SSマグネット関係校や小・中学校との連携強化と本事業について周知をする活動を行う。外部機関との活発な連携を通じて、理数教育の高度化を図る。また、専用Webページの開設や各種媒体、県主催のイベントへの参加など、理数科進学及び理数教育に関わる広報活動、外部機関と情報交換をする場を設定する。

(3)今年度の活動

今年度は準備年度として「理数教育の拠点校」の広報に力を入れてきた。まず本事業の周知にあたり、ポスターを作成し県内の中学校に配布した。



理数教育拠点校のポスター

また、10月14、15日に総合教育センターで行われた「千葉県児童生徒・教職員科学作品

展」の一般公開にあわせ、理数科の紹介ブースを設置した。県内の理数科を設置する公立高校10校から、各校の取組をまとめた映像や資料を集め、展示と配布を行った。参加者の多くが小学生とその保護者であるため、当初は高校の活動について興味を示してもらえるか疑問であったが、ブースに立ち寄る人は学校ごとの取組を比較したり、紹介動画を親子で楽しそうに眺めたりする姿も多くみられた。将来の理数科に興味を持ってもらうきっかけづくりとしては効果的な場であったと思う。



理数科紹介ブースの様子

また、本事業の取組を集約し、成果の共有や案内発信の場として公式Webの開設を行った。

3 松戸向陽高校の取組

(1)はじめに

県内ではそれぞれ学科やコース、系列といった課程を通して福祉教育を学び、介護に関する資格取得に結び付けることができる高校が12校ある。これらの高校は各々が近隣施設や関係団体等と連携しながら福祉教育を推進し、地域における人材を育成、輩出している。

この中で、本校は県内唯一の福祉系専門学科(福祉教養科)を有し、国家資格である介護福祉士養成校としての役割を担っている。また、県内の福祉教育拠点校と位置付けられており、これまでも千葉県高等学校教育研究会福祉教育部会として協働する体制を保ちながら、県内福祉系高校の連携を発展させるとともに、関東地区や全国の福祉系高校との懸

け橋を務めている。

(2)コンソーシアムの設置

令和6年度から、本校を事務局とし、コーディネーターを配置した上で、「千葉県福祉系高校人材育成コンソーシアム（仮称）」が設置される。

このコンソーシアムでは、企業や施設が有する介護福祉技術や情報、福祉系大学、専門学校、社会福祉協議会等の関係諸団体の知見や設備を生かしながら、産・学・官が相互に連携して、千葉県内の高校における福祉教育の質をさらに高め、地域を支える人材を育成する。また、小・中学校やその保護者などに対し、福祉の仕事についての理解促進を図るとともに、福祉教育や職業が持つ魅力を積極的に発信することを設立の目的としている。

(3)今後の展望

現在でも、県内福祉系の学科等を設置する各高校の努力によって、今日的な課題と向き合った様々な学びが実践されている。特にコロナ禍を経験し、実習等の中断が余儀なくされた困難から生み出された学習活動の工夫は、学ぶ側にとっても主体的かつ個別最適化された、新しい実学の在り方として財産ともなっている。



介護実習の様子

少子高齢化が進み、介護人材の圧倒的な不足が社会の耳目を集める中、未来を担う子どもたちが福祉教育の入口で立ち止まる姿もある。イメージだけに左右されない福祉教育を伝え、共生社会進展の一助となるために、産・

学・官の力を結集したコンソーシアムを実現していくことが本校の大切な役割である。

4 匝瑳高校の取組

本校は今年度に制服デザインを一新し、令和6年度には、創立100周年の年に進学を重視した総合学科となる大きな節目を迎える。

(1)総合学科設置にむけて

校訓である「至誠」「剛健」「快活」「高雅」に加え、教職員と生徒とで話し合い、学校生活の中で身に付けてほしいスクールポリシー(S.O.U.S.A)を制定した。



スクールポリシー改定会議の様子

S : Sustain (持続すること)

困難を乗り越えて粘り強く進み続ける。

O : Output (表現すること)

相手に伝わるよう、自分らしく表現する。

U : Unify (統合すること)

学習内容を既習の知識・技能と組み合わせる。

S : Sympathy (共感すること)

相手の言動を公平な視点で分析し理解する。

A : Ambition (大志を抱くこと)

自分の目指す進路を積極的に探究する。

上記の校訓とスクールポリシーを軸に、生徒の学びの目的を明確にさせるための探究の充実、大学卒業後を見据えた、社会に通用するための選択科目の整備を行っている。

(2)幅広い進学に対応する4つの系列

①PEACHキャリア系列

普通科における「文系」よりも、専門的な

科目の選択が可能である。Politics、Education、Art、Communication、Humanitiesの頭文字をとり「PEACH」とした。人間の精神活動の「果実」を学ぶための系列。

②STEMキャリア系列

普通科の「理系」に加えて、理数教科の発展的な内容まで選択が可能である。Science、Technology、Engineering、Mathematicsの頭文字をとり、「STEM」とした。社会の「根幹」技術を学習・創出するための系列。

③国際ブリッジビルダー系列

国際理解コースを発展させ、中国語・韓国語に加え、フランス語・スペイン語の履修を可能にし、海外短期留学を推奨している。グローバルな視点を持ち世界に橋を架ける人材を育成するための系列。

④360°キャリアビルダー系列

幅広い科目選択が可能で、医療系をはじめとした文系・理系にとらわれない学問の融合領域に対応できる系列。

5 銚子商業高校の取組

(1)通信制協力校とは

コロナ禍でICT機器を活用した学習が導入され、自宅での学習の機会も増えたことや、不登校などの様々な理由で通信制高校を志望する生徒が増加している。しかしながら、公立の通信制高校は、千葉市にある千葉大宮高校のみで、千葉市から遠くに住む子どもたちが、公立の通信制で学ぶためには、面接指導（スクーリング）や試験の際に時間をかけ通学する必要があった。そこで千葉市まで通わず、居住地の近くで通信制の授業を受けることを可能にするのが、通信制協力校である。高等学校通信教育規程第3条によると、協力校は、実施校の設置者の定めるところにより実施校の行う面接指導及び試験等に協力する

ものとする、となっている。つまり、協力校の主な役割は、面接指導と試験に協力することである。

(2)通信制協力校の開設に向けて

すでに平成29年度から館山総合高校では、通信制協力校として千葉大宮高校の授業を実施しており、千葉県南部の生徒が館山総合高校水産校舎で学んでいる。

令和6年度からは、銚子商業高校も通信制協力校の指定を受け、通信制の授業を銚子商業高校海洋校舎で開講できるよう準備を進めている。しかしながら銚子商業高校海洋校舎は長寿命化の改修工事のため、当面使用することができず、令和6年度は県立銚子高校の校舎を借りてのスタートとなる。

(3) 学習内容について

- ①通信制協力校では、千葉大宮高校で実施する授業と同じ科目、学習内容を行う。
- ②前期8回、後期8回の年間16回の面接指導を実施する。
- ③令和6年度の銚子商業高校における面接指導については、金曜日1日のみ。（千葉大宮高校の校舎では日・月・火の3日間同じ授業が実施されている。）
- ④定期考査については協力校（令和6年度は県立銚子高校）で実施。レポートについては、千葉大宮高校へ自身で直接送付して提出する。
- ⑤学校行事等については千葉大宮高校の校舎で実施する。
- ⑥協力校で面接指導が実施できない科目等については、銚子高校の校舎で集中スクーリングを行う。

その他細かな点において、千葉大宮高校（実施校）と違うところもあるが、通信制協力校の開始によって、千葉市への通学が難しい子どもたちが、居住地に近い場所で県立の通信制教育を受けることができることとなる。

知的障害教育における学習評価から授業改善につなげる フレームワークに関する研究（令和4～5年度）

県総合教育センター特別支援教育部

1 研究の概要

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の総則では、学習評価の充実として「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」の必要性が明示されている。

これらを踏まえ、令和4年度から2年計画で、知的障害教育における学習評価から授業改善につなげるフレームワークに関する研究に取り組み、「枠組み」に沿って目標設定から指導内容の設定、学習評価を行うことができ、授業改善につなげられるツール「知的障害教育課程の授業改善アシスト」（以下、授業改善アシストという。）を開発した。

2 授業改善アシストの内容構成

授業改善アシストは、大きく分けて六つのシートに分かれている。

- ①手順シート：どういった流れで目標の設定から学習評価、授業改善までを行うのかが一目で分かる。
- ②教科等実態把握シート：各教科の実態を、学習指導要領の段階と対応し把握できる。
- ③個別シート：一人一人の単元の目標や評価規準、判断のための基準、評価等を3観点に基づいて記載できる。
- ④集団シート：集団としての目標、評価規準、判断のための基準、評価を3観点に基づいて記載できたり、振り返りが記載できたりする。
- ⑤比較シート：個別シートの内容が転記され、

一人一人の目標等を比較し確認できる。

- ⑥まとめシート：集団シートから実態や目標、評価規準、学習状況の評価等が転記され、次の授業への改善点等が一目で分かる。

本ツールの特徴として、③個別シートと④集団シートを行き来しながら目標の設定から学習評価まで行うことができることが挙げられる。また、単元全体における学習状況の評価や授業者の振り返り、課題・改善を要する点も記載することができ、⑥まとめシートでの課題等を踏まえ、学習評価から授業改善へつなげられるものとなっている。

手立て、指導上の留意点等	評価基準（判断のための基準）	
	教科	3観点での評価基準
<ul style="list-style-type: none"> ・買い物の計画がスムーズに立てられるよう教師が声掛けを行う。また、買い物の手順が理解できるよう手順表や動画等を準備しておく。 ・スーパーマーケットに行く前に、仮想の店で買い物のシミュレーションを行う。 ・仮想の店やスーパーマーケットで活動するにあたっては、教師が買い物の手順を口頭で質問しな 	生活	<ul style="list-style-type: none"> 「知識・技能」買い物の手順や金銭の扱いなどを理解し、自力または教師の支援を得ながら買い物の計画を立てることができている。 「思考・判断・表現」教師を介して、金銭の大切さや必要性について気付くことができている。 「主体的に学習に取り組む態度」できるだけ自分の力で買い物をしようとしている。

図1 ③個別シート（一部掲載）

3 おわりに

授業改善アシストを活用することで、三つの柱に基づいた目標設定、内容等を踏まえた3観点による学習評価により、指導と評価の一体化を図ることができる。また、単元の学習評価につながる記録をとることができ、授業の振り返りや次の授業へのつながり、教職員間で授業改善アシストを共有することで、授業改善を図ることが可能である。

年度末には、県総合教育センターのWebサイトに公開する。併せて、より使いやすくするために「手引」及び「記載例」も掲載する。また、次年度には、当センターの推薦研修で演習を行う等、教員への周知を図っていく。

千葉歴史の散歩道

「千葉」の名を持つセミの発生地を訪ねて

—つるえ 鶴枝ヒメハルゼミ発生地—

千葉県教育振興部文化財課指定文化財班文化財主事 伴 光哲



セミと言われて思い浮かべる種というと、アブラゼミやミンミンゼミを連想する人が多いのではないかと。これらのセミは公園や住宅街でも鳴き声を聞くことができ、なじみ深いと思われる。しかし、千葉県に生息するセミの中に「ヒメハルゼミ」という種がいることを知る人はどれだけいるだろうか。

ヒメハルゼミはヒグラシを小さく、また黒っぽくしたような外見をしているが、木の高い場所に止まっていることが多く、その姿を目にする機会は少ない。6月後半から7月にかけて「ウーン、ウーン……」とも「ジリリオー、ジリリオー」とも表現される鳴き声で集団で鳴く習性を持ち、特に夕方になると、森全体が鳴いているかのような蝉時雨を聞くことができる。関東地方から鹿児島県の徳之島にかけての照葉樹林に生息するが、原生林に近い環境にしか生息できないことに加え、移動能力も低く、全国的にも生息地は限られている。

そんなヒメハルゼミは「千葉」の名を持つ昆虫でもある。本種は茂原市鶴枝の八幡山で採集された標本に基づき、大正6年に新種として記載された。学名には「千葉（県）産の」を意味する“chibensis”とつけられている。鶴枝の生息地は国内有数のものとされ、昭和16年12月に国指定天然記念物「鶴枝ヒメハルゼミ発生地」として指定された。周囲に水田や住宅街が広がる中でひととき存在感を放つ八幡山には、シイ類やカシ類の大木が多く、鬱蒼とした照葉樹林が広がる。こうした環境が八幡神社の社叢林

として保護され続けたため、本種は当地で生き続けることができたのだろう。

身近な文化財の調査を通じ、地域の歴史や自然に対する理解や郷土愛を育むため、地元の鶴枝小学校では毎年セミの抜け殻の調査を行っている。また、本種の生息地が国の天然記念物に指定されていることを普及するため、平成4年7月には市内の電話ボックスに巨大なセミのオブジェが設置された。このオブジェは電話ボックスの撤去に伴って市に寄贈され、現在は天然記念物指定地に隣接する、鶴枝公民館に飾られている。これらのエピソードからも、ヒメハルゼミとその生息地が地元住民に大切にされている様子が伺える。

ヒメハルゼミの大合唱を鶴枝で聞くことができるのは、本種の生息環境や分布が特異的であることに加え、地元の方々が森を守り続けた賜物である。そんなことに思いを馳せつつ、今年の夏はこの不思議なセミの鳴き声を聞きに鶴枝に行ってみてはいかがだろうか？



鶴枝公民館に設置されたヒメハルゼミのオブジェ

千葉教育 桜 (No. 685) 令和6年3月14日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター (代表) 鉄井 修一
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204
URL <https://www.ice.or.jp/nc/>
印刷所 千葉県療育センター いずみの家
〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465

令和6年度
シリーズ 現代の教育事情

蓮 686号	教職の魅力
萩 687号	交流及び共同学習の実践
菊 688号	小中一貫教育の現状
梅 689号	学級経営を考える
菜 690号	外国人児童生徒等教育の実際
桜 691号	学校・家庭・地域の連携

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育
桜号 読者アンケート



表紙写真について

木更津市立清川中学校 2年生国語科「短歌の味わい」の学習風景です。
歌人をお招きして、グラウンドで吟行しました。